氏族連合体・日本の原住民

『土蜘蛛〔クズ・サエキ・ヤツカハギ・鬼・蛇(オロチ)〕・エミシ・アイヌ』

人間国土防衛の歴史とアイヌの口承文芸!!

【Ⅰ】

20世紀末、日本の政治家たちの心もとない「日本単一民族説」発言に端を発したアイヌ民族のプロテストは、2019年アイヌ民族を北日本周辺(北東北・北海道・千島・サハリンの一部地域)の先住民であると認めた“アイヌ施策推進法”を設立するに至らしめた。

現在の民族学的見解では、アイヌは日本民族を構成する主要3集団【本土日本人・沖縄人(琉球人)・北海道アイヌ】の一つである。

15世紀以降の北海道では、ヤマトの武力侵略に対してアイヌが幾度となく防衛戦を展開してきた史実が記録として残っている。

そのアイヌの文化的所産に位置付けられるイナウ(削りかけ・削り花)やアイヌ文様、アイヌ語の地名などと考察されるものが、何故か日本列島各地に散見されるのである。

最新の分子人類学では、列島内の民族と近隣の民族とを対象に、縄文人との近似性に関する研究が行われており、また形質人類学では、アイヌ・琉球人・縄文人の考古学的時代区分に基づく人骨の比較検討がなされている。

そこで、日本の主要3集団のどの民族が列島の先住民であるのか、下記内容(①－⑫)に基づいて多様なデータを参考にしつつ3回に分けて解説する。

またアイヌ民族の始祖神にして口承文芸の主

❶ 日本の原住民(土蜘蛛・エミシ・アイヌ)などの死闘の歴史。
❷ アイヌ文化期時代とは。
❸ アイヌの口承文芸に謡われた「ヒエ」の起源。
❹ アイヌの口承文芸に謡われた海獣狩猟具の「雌型銛頭」の起源。
❺ アイヌの口承文芸に謡われたアマッポ(自動発射弓矢)と毒の起源。
⑥ アイヌの口承文芸に謡われた祭具イナウ(削りかけ・削り花)の全国的分布。
⑦ アイヌ文様と土器(縄文・続縄文)文様・装飾古墳文様の類似性。
⑧ 装飾古墳に囲まれた「シラヌイ現象」と「鏡」との考察。
⑨ アイヌと奄美大島の女人に伝わる入れ墨の風習。
⑩ 形質人類学における「縄文人」「渡来系弥生人」「古墳時代人」「続縄文人」の各人骨と「アイヌ人骨」との比較研究は何を示唆したか。
⑪ 分子人類学における「縄文人」「本土日本人(ヤマト人)」「沖縄人(琉球人)」「アイヌ」及び列島周辺の人々のゲノム研究は何を示唆したか。
⑫ 日本列島各地に散在するアイヌ語地名について。

人公であるオキクルミカムイ(以下オキクルミ)が、どの時期に天界(宇宙)よりアイヌモシリ(北海道)へ降臨したのか考古学的視点から考察する。

最新の学説では、約137億年前の”ビッグバン“で宇宙が始まり、現生人類とされる”ホモサピエンス“は約20～10万年前のアフリカで誕生したという。

その後、10～6万年前頃からホモサピエンスの世界への拡散が始まり、考古学的視点では約37,000年前の旧石器時代後期を日本への到達時期としている。

その日本には世界史とは異なる考古学的時代区分が設けられている。

例えば物質文化の特色(狩猟採取・土器、水稲農耕・金属器、古墳の築造)に基づいた縄文・弥生・古墳の各時代と支配層(王朝・武家)の交代に伴う政権の所在地に基づいた飛鳥・奈良・平安・鎌倉・室町・安土桃山・江戸などの各時代がある。

同じ日本列島でも北海道の考古学的時代区分は本州とは異なっている。

北海道には弥生時代・古墳時代が存在せず、5世紀頃まで続いた続縄文時代がそれに該当する。

その後、樺太や大陸沿海州との文化(オホーツク文化期・トビニタイ文化期)が混入する擦文時代が12～13世紀頃まで続く。

擦文時代に該当するのが古墳、飛鳥・奈良・平安時代である。

そして、狩猟・漁労・採集経済、農業や和人との交易に基盤を置くアイヌ文化期時代へと移行して近世、近代に至ったといわれており、平安時代末期以降(或いは鎌倉時代以降)がアイヌ文化期時代に該当するのである。

一方、南の沖縄(琉球)も本州とは異なる貝塚時代、グスク(聖所・城塞)時代という独特の時代区分が存在している。

では、12～13世紀に北海道に出現したアイヌ文化期とはどのようなものであったのであろうか？

日本列島に人が住始めたのは約37,000年前、世界に比類のない土器文化の始まりは 約16,500年前（縄文土器は約13,000年前)、稲作の開始は地域によって異なり約3,000年前 ～2,300年前)、金属器(青銅器・鉄器)の到来は約2,300年前、古墳の出現は約AD3世紀頃である。

この時代区分の中で採取、狩猟、漁猟生活に基盤を置き、約16,000年間連綿として続いた縄文時代と稲作農耕や金属器に基盤を置いた弥生時代とでは根本的な違いが生じている。

自然との共生と物質文化との相違もさることながら、弥生文化が北九州から西日本、東日本を席巻、台頭するにつれ縄文文化は衰退の一途をたどり弥生文化に吸収される。

地域によっては縄文文化の風習を残しつつもそれが形骸化する。

ついには特異なＤＮＡ(遺伝子)の持ち主でもある縄文人の痕跡さえも日本史の表舞台から消え去られるのである。

縄文人はどこに消え去ったのであろうか？

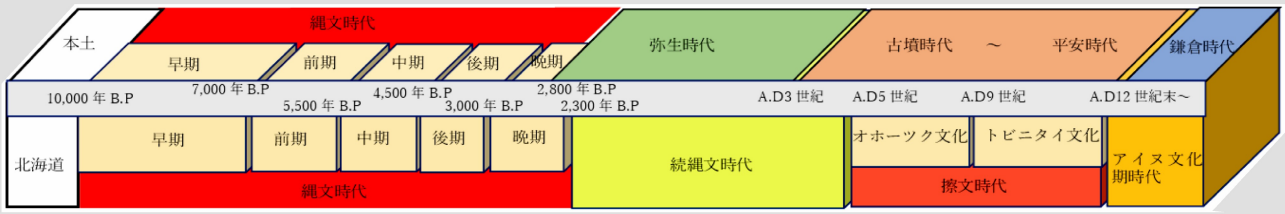


図12　考古学的時代区分の各年代(始期と終期)　※年代を表す指標B.P(前)

❶ 日本の原住民（土蜘蛛・エミシ・アイヌ）などの死闘の歴史

日本書紀や類聚国史などの歴史書に記された蝦夷（エミシ・エゾ・エビス）、夷（エミシ・エビス・ヒ・イ）、戎（エミシ・エビス・ジュウ）などという用語は、ヤマト王権・大王（天皇）や時の権力者などの武力による統一国家の支配に対して、帰順を潔しとせず徹底抗戦した原住民を意味している。

一般的には「辺境の地に住む未開人」「野蛮人」「異俗人」「異民族」「猛々しい人（つわもの）」などの意味として使用され、どちらかというと「夷」は関東・東北、「蝦夷」は東北・北日本（北海道・樺太・千島）、そして「戎」は西国（九州）の原住民に付されている。

このような表現は、古代中国における漢民族の皇帝や国家を最高のものとしてその中心に位置付け、外側四方には低俗な文化を持つ東夷・西戎・南蛮・北狄と呼称された野蛮人が存在するという“中華思想”に傾倒したことから誕生したものである。

蝦夷、夷、戎に共通する「エミシ」との表現は神武紀の久米歌（日本書紀）8首の一つに登場する。

現代語訳では『エミシオ、ヒダリ、モモナヒト、ヒトハイエドモ、タムカイモセズ』となり、『エミシは、一人で、百人力であると、人は言うけれど、抵抗することはなかった』との解釈である。

この歌は忍坂（現奈良県桜井市忍坂）の地においてヤマト神武軍と八十建軍とが激突した際、勝機が望めない神武軍が常套手段である奇計を巡らし八十建軍を和議の席上（酒席）にて騙し討ちにしたその直後に謡われている。

エミシと称された“つわもの軍団”ではあったが奇計の前にはほぼ無抵抗の状態で非業の最後を遂げており、八十建（ヤソタケル）とは固有名詞ではなく“大勢の戦士を束ねた地域の″おさ″を意味している。

また、神武（崇神）軍と八十建軍との戦闘状況を物語る他の久米歌には、八十建の前に”土雲（ツチグモ）が冠されているが、この”土雲“とはどのような意味なのだろうか。

ヤマトが九州・北陸・関東への武力侵略の途上、王権に帰順しない多数の抵抗集団と遭遇し戦闘に至った史実を古文献（古事記・日本書紀・風土記）から推察することができる。

その抵抗集団（原住民）にはツチグモ（土蜘蛛・土雲）・クズ（国栖または国巣）・ヤツカハギ（八束脛）・サエキ（佐伯）・オニ（鬼）・夜刀の神（蛇）またはオロチ（大蛇）」などという、いわゆる蔑称で呼ばれている。

それらの蔑称からは獣や妖怪としてのイメージが強く、ヤマトは土着の原住民である抵抗集団を人間以下の存在と見なしていたのである。

おそらく、抵抗集団の容姿や行動、生活スタイルとの関係から名付けられた可能性が高いと考えられた。

久米歌からは東日本や北日本の抵抗集団のみ

ならず、西日本(近畿大和)の抵抗集団にもエミシを使用していたことが判明した。

夷(エミシ)との呼称から八十建などの抵抗集団はアイヌ系であった可能性が浮上する。

◎土蜘蛛と竪穴住居◎

古代においてヤマト王権への帰順を表明しない土着の抵抗勢力を、蔑視の意味を込めて「ツチグモ(土雲・土蜘蛛・都知久母)」「クズ(国栖・国巣)」「サエキ(佐伯)」「ヤツカハギ(八束脛)」「オニ(鬼)「夜刀の神(蛇)・オロチ(大蛇)」などと様々に呼称しているが、古事記(神武紀)、日本書紀(神武紀・景行記・神功紀) 、風土記(陸奥・越後・常陸・摂津・豊後・肥前)などでは、「土蜘蛛(土雲)」や「都知久母」との表現が多く見受けられる。

常陸国風土記によると国巣や佐伯は土蜘蛛、八束脛と同一であり、佐伯は「さえぎる者」との意味があり天皇に帰順しなかった者のことであるという。

つまり、様々に呼称されてはいるが、「土蜘蛛」との呼称が原点になるのである。

古文献に登場する原住民の分布域は、九州・近畿・関東甲信越・東北などと各地に点在している。

主な地域に豊後国(大分県)4箇所、筑後国(福岡県)1箇所、肥前国(佐賀県・長崎県)7箇所、肥後国(熊本県)1箇所、日向国(宮崎県)1箇所、大和国(奈良県)5箇所、越後国(1箇所)、常陸国(茨城県)3箇所であり、首長名と思われる名前は33名で陸奥国風土記逸文の福島県の土蜘蛛(土知朱)8名を加えると41名(女性名を想起させる者10名)となる。

さらに、熊本県・阿蘇または宮崎県・高千穂の鬼八、岡山県・吉備地方の温羅(ウラ・オンラ)、岐阜県・飛騨地方の両面スクナ(4～5世紀)、長野県・安曇野の八面大王またはヤメノオオキミ(8世紀末)、約12年間にわたりヤマトと戦った蝦夷の総大将阿弖流為(アテルイ)と副将母礼(モレ)などがいる。

さらに15世紀以降のアイヌとヤマトとの戦闘へと続く。

ヤマトの原住民との戦闘において、原住民の「蜂起」あるいは「抵抗運動」と見る向きもあるが、あくまでもヤマト側の侵略であり、また既に占領されている訳でもなく「蜂起放棄」「抵抗運動」などという表現は極めて不適切である。

ウクライナとロシアとの戦争をウクライナのレジスタンスとは誰もいわない筈だ。

一般に「ツチグモ」という名称は、「土隠(つちごもり)」に由来し、該当する原住民の横穴や穴に籠るという竪穴住居生活スタイルから名付けられている。

その「ツチグモ」について、神武紀や常陸国風土記(国巣の伝説)では次の様に記述してい

遥拝所奥の飛騨を守った英雄、両面宿儺の像

デフォルメされた8つの顔のモニュメントが印象的な八面大王足湯。

図13　入江貝塚公園内に復元した縄文時代後期（約4,000年前）の土ぶき竪穴式住居
（写真所蔵先：洞爺湖町教育委員会）

る。

◎神武紀◎

“高尾張邑に土蜘蛛がいて、その体つきは、身の丈が低く手足が長くて侏儒（しゅじゅ）に似ていた”

“民心は素朴である。彼らは穴に住み、未開の風習が常である。”

※侏儒（背丈が低い人、見識がない人をあざけっていう言葉）

◎常陸国風土記◎

“この（佐伯らは）あちこちに穴を掘って土窟（つちむろ）を設け、常に住んでいた。

人が来るとすぐに窟に入って隠れるが、人が去ると外に出て遊んだ。

（その性質は）狼の性に梟の情を持ち、鼠のように窺い、狗のように盗むというもので、招いても慰められることはなく、一般の人々とは相容れない隔たりがあった“

直径10mの円墳で南に開口する朝来山の鬼の窟古墳。1km圏内には福原横穴墓群（5～6穴）がある。熊本市・八代市には鬼の名が付く古墳が多い。

約1,600年前に掘られた総数61基の鍋田横穴群。菊池川の支流岩野川の西側に位置した我が国を代表する装飾横穴。（山鹿市鍋田）

※狼の性と梟の情（悪心と暴虐性の持ち主）

神武紀では身体的（形態的）特徴と住居スタイルについて、常陸国風土記では住居スタイルと性格及び神出鬼没な行動などについて言及している。

そこで、大陸系渡来民族であるヤマト神武軍と日本列島の原住民である「ツチグモ」とを比較すると身体的に差異が見て取れる。

これは、大陸系弥生人（北部九州・山口タイプ弥生人）及び大陸系古墳人（3世紀～７世紀）と縄文人（東日本）との骨学的研究の比較において、どちらかというと大陸系弥生人・古墳人は高顔、高身長であるのに対して、縄文人は低身長、角顔で相対的に手足が長いとの研究結果がでており、記紀や風土記の「身の丈が低く手足が長くて侏儒に似ていた」との表現を裏付けている。

また、記紀や風土記は「ツチグモ」などが穴居生活者であることに言及している。

縄文・弥生・古墳時代を通じて最も一般的な住居の形式は竪穴住居（竪穴式住居）もしくは竪穴建物である。

「ツチグモ」の穴居生活は考古学的視点からも十分に裏付けられるのである。

竪穴住居とは、地面を40cm～50cmほど掘り込んで平らな土間の床をつくり、その中に複数の柱を建てて梁や垂木を組み、上部に葦などの植物や土で屋根を葺き、その中央に出入り

口を設けた半地下式の住まいのことである。

ヨーロッパでは中石器時代にこの形態の建物が出現し、やがて新石器時代に世界各地で盛行する。

東北アジアや北アメリカの漁労、狩猟民であるユカギール、チュクチ、コリヤーク、イテルメン・ニブヒ、樺太及び千島アイヌ、アレウト、イヌイットなどは19世紀末頃まで竪穴住居を使用していたとの記録がある。

日本では主に縄文時代から中世(13世紀)まで国内全域で使用されていたが、一部近世、近代まで小屋として存在していたものもある。

床面の形状、大きさ、深さ、柱の本数は地域や時代により多様だ。

一方、弥生時代後半及び古墳時代に出現し始め、その後に主流となった地面を掘り込まない地上式の「掘立柱住居(掘立柱建物)」がある。

住居として使用される以前は特別な用途(倉庫・神殿・見張り台・権力者の居館)などに限られており、三内丸山遺跡(青森県)でも一部使用されていた。

掘立柱建物が構築されていた代表的遺跡に吉野ヶ里(佐賀県)・大園(大阪府)・森垣外(京都)、池上曽根(奈良県)などがあり、ヤマトが拠点を構えた畿内地域では５世紀頃より他の地域に先駆けて、「竪穴住居」から「掘立柱建物」へと移行した状況が窺える。

中国や朝鮮半島の特定の地域では弥生時代より「掘立柱住居」が使用されていたという。

この事実は本州における「掘立柱住居」の原点が大陸系弥生人及び大陸系古墳人であることを物語っているようである。

北海道では地域と季節により、竪穴式住居とチセの併用が行われていた。

ヤマトはたとえ「ツチグモ」であっても王命に服して帰順した者は「ツチグモ」とは呼ばず、帰順しない抵抗者に対しては、その容姿や住居スタイルを蔑んで「ツチグモ」と蔑視したのであった。

ヤマトは太陽神と何ら関係性のない自らの祖先を太陽神として祀り上げ、歴史的にはアマテラスの代々の子孫である歴代の天皇を太陽神の末裔であると偽証、崇拝させた。

古代において彼らは侵略の戦術に多くの鏡を応用した。

それらを太陽光に反射させ「太陽円盤」と称して、多くの原住民を搾取しヤマトの支配下に治めている。

偽物の太陽円盤である鏡を量産したヤマトは、王権の正当性を誇示せんがため地方の首長たちにそれを分け与えたのである。

多くの首長墓から鏡が出土するのはこのような理由である。

「天孫降臨」の文言や「日の丸」が示唆するが如く、正当な王権の承認権が天(宇宙側)にあることを承知していたヤマトは、アイヌにコンタクトした「太陽神オキクルミ」、その搭乗機である「シンタ」に関する口承文芸を言葉巧みに利用した。

オキクルミの「人間らしく生きる」との教えを遵守する「ツチグモ＝アイヌ」が、非人間的集団であるヤマトを拒絶し戦闘に至るのは至極当然の理といえる。

歴史的には強者の弱者への圧迫と映るが、実際は民族同士の争いとは異なり「人間」対「非人間」或いは「宇宙文化」対「非宇宙文化」の争いなのである。

ヤマトは己の王権の正当性を盤石にするべく原住民の抹殺を容赦なく遂行した。

米国のインデイアン(ホピ族)、オーストラリアのアポリジニーなどに同様の事例がある。

その争いは二十一世紀の宇宙時代になろうともスタイルを変えて続いている。

◎ヤマトと死闘を繰り広げた日本各地の原住民一覧◎

表1◆　土蜘蛛

地図番号	該当者	年　　代	古文献記載	登場地	現該当地
1	尾(お)生(お)ふる土雲(ツチグモ)八十建(ヤソタケル)	神武天皇(3～4世紀)	古事記	忍坂(おさか)の大室(おおむろや)	奈良県桜井市忍坂(おっさか)
2	新城戸畔(ニイキトベ)	神武天皇(3～4世紀)	日本書紀	層富県(そほのあがた)の波多(はた)の丘岬(をかさき)	奈良県奈良市五条町、唐招提寺の西あたり。あるいは同市北椿尾(つばお)・南椿尾町近辺。また「新城」は同県大和郡山市新木町(にきちょう)あたりの地名を指す
3	居勢祝(コセノハフリ)	神武天皇(3～4世紀)	日本書紀	和珥(わに)の坂下(さかもと)	奈良県天理市和邇町(わにちょう)。また「居勢」は同県御所(ごぜ)市古瀬(こせ) のこととも
4	猪祝(ヰノハフリ)	神武天皇(3～4世紀)	日本書紀	臍見(ほそみ)の長柄(ながら)の丘岬	奈良県御所市長柄、あるいは同県天理市名柄町
5	名草戸畔(ナグサトベ)	神武天皇(3～4世紀)	日本書紀	名草邑	和歌山市名草山周辺
6	土蜘蛛(八十梟師・ヤソタケル)	神武天皇(3～4世紀)	日本書紀	高尾張邑(葛城)	奈良県御所市西部、葛城山・金剛山の東麓にあたる葛城地域一帯
7	兄師木又は兄磯城(エシキ)又は兄宇迦斯又は兄猾(エウカシ)	神武天皇(3～4世紀)	古事記 日本書紀	大和の宇陀の県(うだのあがた)又は磐余邑(いわれのむら)	奈良県桜井市又は宇陀郡あたり
8	土蛛(ツチグモ)	神武天皇(3～4世紀)	摂津国風土記逸文	摂津国	大阪府北西部と兵庫県の南東部
9	山の佐伯(サヘキ)・野の佐伯【国巣(クズ)・都知久母(ツチグモ)・夜都賀波岐(ヤツカハギ)ともいう】		常陸国風土記	茨城郡	茨城県中南部
10	土雲(ツチクモ)		常陸国風土記	薩都(さつ) の里	茨城県常陸太田市里野宮町(さとのみやちょう)
11	八掬脛（ヤツカハギ）	崇神天皇(3～4世紀)	越後国風土記逸文	越(こし)の国	北陸地方
12	大鉗(オオハシ)・小鉗(ヲハシ)	瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)	日向国風土記逸文	知鋪(ちほ)の郷	宮崎県西臼杵郡高千穂町
13	陸耳御笠（クガミミノノミカサ）・匹女（ヒキメ）	崇神天皇(3～4世紀)	丹後国風土記残欠	志楽(しらく)の郷の青葉山(あをばやま)・大内(おほうち)の郷の爾保崎(にほさき)・志託(したか)の郷・川守(かはもり)の郷・蟻道(ありぢ)の郷の血原(ちはら)・与佐(よさ)の大山(おほやま)	**志楽**＝京都府舞鶴市東部志楽川流域・青葉山は同市東部と福井県大飯郡高浜町の境、**大内**＝京都府舞鶴市西部の大内(おおうち)・爾保崎は同市西部下安久(しもあぐ)の匂崎(においざき)、二尾(にお)、**志託**＝京都府舞鶴市西部の志高(しだか)、**川守**＝京都府福知山市北部の大江町河守(こうもり)、**蟻道**＝京都府福知山市北部の北有路(ありじ)・南有路・血原は同市同町の千原(せんばら)、**与佐の大山**＝京都府福知山市と与謝郡与謝野町(よさのちょう)の境の大江山

14	黒鷲（クロワシ）・神衣媛（カムミゾヒメ）・草野灰（クサノハヒ）・保々吉灰（ホホキハヒ）・阿邪爾那媛（アザニナヒメ）・栲猪（タクシシ）・神石萱（カムイシカヤ）・狭磯名（サシナ）	景行天皇（4世紀後半）	陸奥国風土記逸文	八槻（やつき）の郷	福島県東白川郡棚倉町（たなぐらまち）八槻
15	青（アヲ）・白（シロ）	景行天皇（4世紀後半）	日本書紀 豊後国風土記	鼠岩窟（ねずみのいはや）・稲葉（いなば）の川上・血田（ちた）	**鼠石窟**＝不明・**稲葉の川上**＝大分県竹田市稲葉川流域・**血田**＝大分県豊後大野市緒方町知田（ちだ）
16	打猨（ウチサル）・八田（ヤタ）・国摩侶（クニマロ）	景行天皇（4世紀後半）	日本書紀 豊後国風土記	直入県（なほりのあがた）の禰疑野（ねぎの）	大分県竹田市禰疑野神社周辺
17	津頬（ツララ）	景行天皇（4世紀後半）	日本書紀	玉杵名邑（たまきなのむら）	熊本県玉名市・荒尾市・玉名郡周辺）
18	田油津媛（タブラツヒメ）・夏羽（ナツハ）	神功皇后（4世紀後半～5世紀）	日本書紀	山門県（やまとのあがた）	福岡県みやま市瀬高町（せたかまち）山門（やまと）近辺
19	打猴（ウチサル）・頸猴（クビサル）	崇神天皇（3～4世紀）	肥前国風土記	肥後国益城（ましき）郡朝来名（あさくな）の峰	熊本県上益城郡益城町と御船町の境にある朝来山（あさこやま）
20	大山田女（オホヤマダメ）・狭山田女（サヤマダメ）		肥前国風土記	佐嘉（さか）川の川上	佐賀県佐賀市大和町東山田（佐嘉川は現在の嘉瀬川）
21	土蜘蛛	日本武尊	肥前国風土記	小城郡	佐賀県小城（おぎ）市
22	海松橿媛（ミルカシヒメ）	景行天皇（4世紀後半）	肥前国風土記	賀周（かす）の里	佐賀県唐津市見借（みるかし）
23	大身（オホミ）	景行天皇（4世紀後半）	肥前国風土記	大家（おほや）の嶋	佐賀県唐津市馬渡（まだら）島、あるいは長崎県平戸市的山（あづち）大島
24	大耳（オホミミ）・垂耳（タリミミ）	景行天皇（4世紀後半）	肥前国風土記	大耳＝値嘉（ちか）の郷（さと）　小近（をちか）の嶋、垂耳＝同　大近（おほちか）の嶋	長崎県五島列島
25	八十女人（ヤソヲミナ）	景行天皇（4世紀後半）	肥前国風土記	嬢子山（をみなやま）	佐賀県多久（たく）市東南部の両子山（ふたごやま）、あるいは近隣の山
26	大白（オホシロ）・中白（ナカシロ）・少白（ヲシロ）	景行天皇（4世紀後半）	肥前国風土記	能美（のみ）の郷	佐賀県鹿島市能古美（のごみ）地区
27	土蜘蛛	景行天皇（4世紀後半）	肥前国風土記	速来（はやき）の村	長崎県佐世保市早岐（はいき）
28	浮穴沫媛（ウキアナワヒメ）	景行天皇（4世紀後半）	肥前国風土記	浮穴（うきあな）の郷	不明　諸説有　長崎県彼杵地域
29	鬱比表麻呂（ウツヒオマロ）	神功皇后（4世紀後半～5世紀）	肥前国風土記	周賀（すか）の郷	不明　諸説有　長崎県彼杵地域
30	打猴（ウチサル）・頸猴（クビサル）	崇神天皇（3～4世紀）	肥後国風土記逸文	肥後国益城（ましき）郡朝来名（あさくな）の峰	熊本県上益城郡益城町と御船町の境にある朝来山（あさこやま）
31	土蜘蛛		豊後国風土記	井（いしゐ）の郷	大分県日田市石井（いしい）
32	五馬媛（イツマヒメ）		豊後国風土記	五馬山	大分県日田市天瀬町五馬市（いつまいち）
33	小竹鹿奥（シノカオキ）・小竹鹿臣（シノカオミ）	景行天皇（4世紀後半）	豊後国風土記	網磯野（あみしの）	大分県豊後大野市朝地町（あさじまち）綿田（わただ）阿志野（あじの）

表2 ◆　国栖・佐伯

地図番号	該当者	年　　代	古文献記載	登場地	現該当地
34	手鹿(テガ)(佐伯)		常陸国風土記	行方(なめかた)郡	茨城県行方市北西部　手賀
35	疏弥ビ古(ソネビコ・ビは田へんに比)(佐伯)		常陸国風土記	行方郡	行方市北部　玉造地区周辺
36	小高(ヲタカ)(佐伯)		常陸国風土記	行方郡	行方市南部　小高
37	夜尺斯(ヤサカシ)・夜筑斯(ヤツクシ)(国栖)	崇神天皇(3～4世紀)	常陸国風土記	行方郡	茨城県潮来市・潮来市中部小高・潮来市中南部小泉南小字・江崎(えさき)
38	鳥日子(トリヒコ)(佐伯)	倭武天皇(ヤマトタケル)	常陸国風土記	行方郡	茨城県鉾田市当間(とうま)
39	寸津毗古(キツヒコ)・寸津毗売(キツヒメ)(国栖)	倭武天皇(ヤマトタケル)	常陸国風土記	行方郡	茨城県行方市北東部　内宿字化蘇沼(けぞぬま)

◆　蝦　夷

地図番号	該当者	年　　代	古文献記載	登場地	現該当地
40	阿弖流為(アテルイ)・母禮(モレ)	奈良時代末～平安時代(8世紀末 ～9世紀初)	続日本紀	陸奥国胆沢	岩手県奥州市

◆　熊　襲

地図番号	該当者	年　　代	古文献記載	登場地	現該当地
41	熊曽建（クマソタケル）	景行天皇(4世紀後半)	古事記	肥後の球磨 大隅の曾於	熊本県球磨郡 鹿児島県曾於地区
42	厚鹿文（アツカヤ）・迮鹿文（サカヤ）【熊襲八十梟帥（クマソノヤソタケル）】	景行天皇(4世紀後半)	日本書紀	襲国（そのくに）	熊本県人吉市周辺　球磨川上流域・鹿児島県霧島市周辺
43	川上梟師（カワカミタケル）又は石鹿文（トロシカヤ）	景行天皇(4世紀後半)	日本書紀	熊襲国 （くまそのくに）	熊本県人吉市周辺　球磨川上流域・鹿児島県霧島市周辺
44	熊襲	仲哀天皇(4世紀後半)	日本書紀	熊襲国 （くまそのくに）	熊本県人吉市周辺　球磨川上流域・鹿児島県霧島市周辺

◆　隼　人

地図番号	該当者	年　　代	古文献記載	登場地	現該当地
45	隼人	7～8世紀	古事記 日本書紀	阿多　・　大隅	鹿児島県

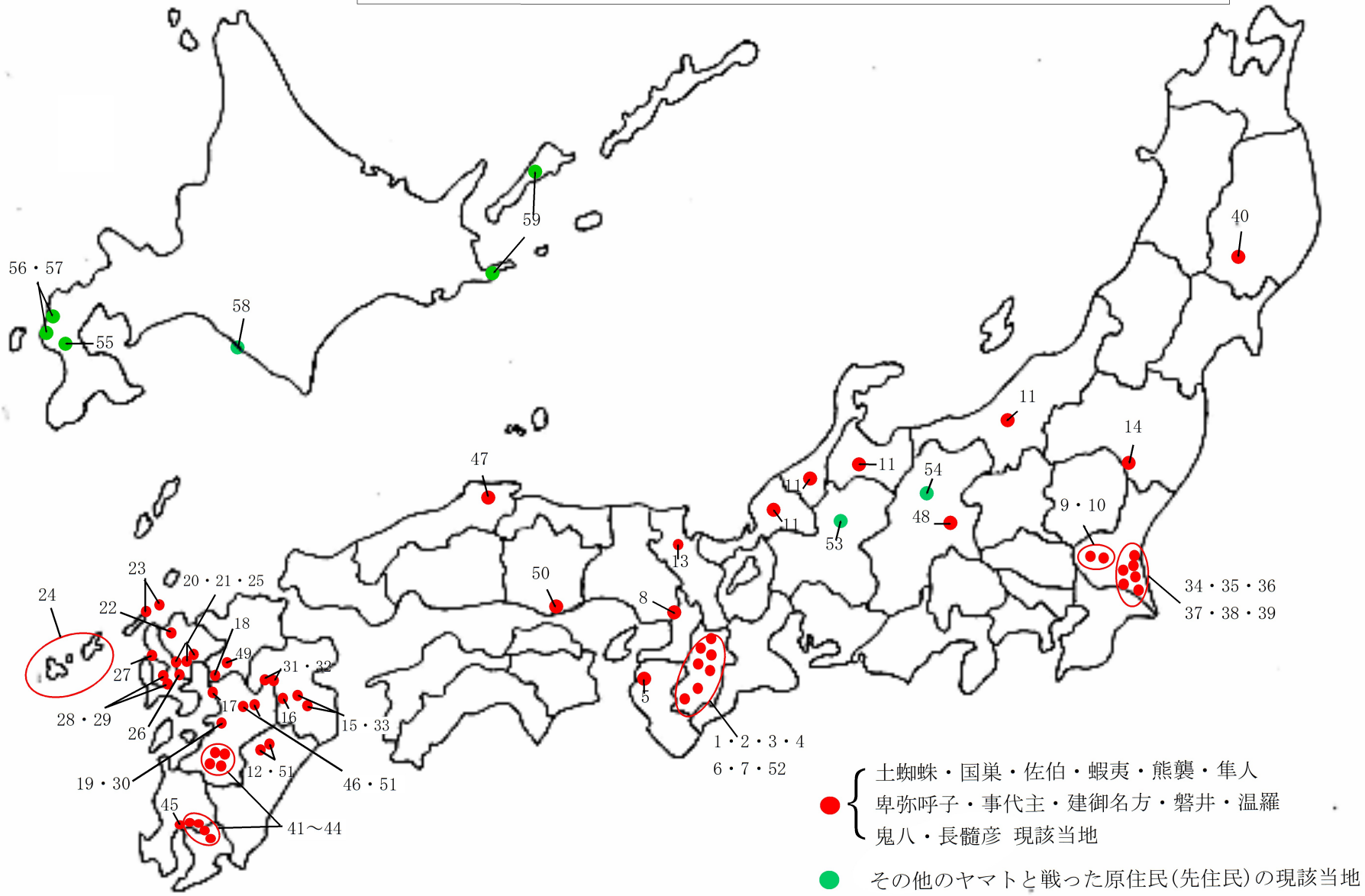
表3 ◆その他の原住民

地図番号	該当者	年　　代	古文献記載	登場地	現該当地
46	卑弥呼子(ヒミココ・ヒコミコ)	3世紀前半	魏志倭人伝	狗奴国(クナコク)	諸説有り・熊本県菊池地方
47	事代主(コトシロヌシ)		古事記 日本書紀	御大之御前(みほのみさき、美保ヶ埼)	島根県美保関町
48	建御名方(タケミナカタ)又は伊勢津彦(イセツヒコ)		古事記	科野国州羽海(しなのくにすわうみ)	長野県諏訪地方
49	磐井(イワイ)又は筑紫君磐井(ツクシノキミイワイ)	継体天皇(6世紀前半528年)	古事記 日本書紀 筑後国風土記逸文	筑紫国	福岡県八女郡
50	温羅(ウラ)	崇神天皇(3～4世紀)	備中国大吉備津宮略記 備中誌・吉備津宮縁起	吉備	岡山県南部吉備地方・総社市奥坂
51	鬼八(オニハチ・キハチ)	神武天皇(3～4世紀)	十社大明神紀 高千穂庄神蹟明細記		熊本県阿蘇地方・宮崎県高千穂町
52	長髄彦又は那賀須泥毘古(ナガスネヒコ)登美ビ古(トミビコ・ビは田へんに比)	神武天皇(3～4世紀)	古事記 日本書紀	大和国	奈良県
53	両面宿儺(リョウメンスクナ)	仁徳天皇(4世紀末～5世紀)	日本書紀	飛騨国	岐阜県高山市
54	魏石鬼八面大王（ギシキハチメンダイオウ）	桓武天皇(平安時代7世紀後半～8世紀)	仁科濫觴記(にしならんしょうき)	安曇野有明山	長野県安曇野市
55	コシャマイン	室町時代(1457年)	アイヌ民族抵抗史 蝦夷島と北方世界	蝦夷地	北海道渡島半島東部(八雲町)
56	タナサカシ(タナケシ・タナイヌ)	室町時代(1529年)	アイヌ民族抵抗史 蝦夷島と北方世界	蝦夷地・セタナイ	北海道瀬棚町
57	タリコナ	室町時代(1536年)	アイヌ民族抵抗史 蝦夷島と北方世界	蝦夷地・セタナイ	北海道瀬棚町
58	シャクシャイン	江戸時代前期(1669年)	アイヌ民族抵抗史 蝦夷島と北方世界	蝦夷地・シベチャリ	北海道新ひだか町静内
59	クナシリ・メナシの戦いでアイヌ側の首謀者とされ処刑された37名のアイヌ【セッパヤ(セツハヤフ)・マメキリ・シトノエ他34名】	江戸時代(1789年)	三十七本のイナウ アイヌ民族抵抗史 蝦夷島と北方世界	蝦夷地・クナシリ、メナシ地方	北海道東部(根室市・別海町・標津町・中標津町・羅臼町)、国後島

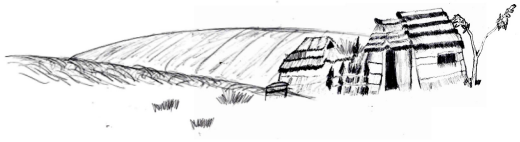
※　表中の「地図番号」は、図14の「ヤマトと死闘を繰り広げた日本各地の原住民の分布図」に表記した番号に適合する。

※　表中の「年代」は、古代の天王の中で実在するか否か、また在位期間等諸説あるが、「神武天皇＝崇神天皇」の可能性が高く、他の資料等からのおおよその年代を推定した。

図14　ヤマトと死闘を繰り広げた日本各地の原住民分布図



❷ アイヌ文化期時代とは？



同じ日本列島ではあるが本州、北海道、沖縄(琉球)などの日本史に特有の考古学的時代区分(文化区分)が大きく相違していることは既に述べた。

本州では土器文様や焼成の相違、水稲の開始や金属器の到来、そして、円墳や前方後円墳などの古墳群の出現という物質文化の特徴に因んで縄文、弥生、古墳時代と名付けている。

それ以後の時代区分は支配層(王朝・武家)の交代に伴う政権の所在地に因んで飛鳥・奈良・平安・鎌倉・室町・安土桃山・江戸・・・などと名付けている。

本州の弥生時代の始まりが従来はBC4世紀頃とされていたが、最新のAMS法を用いたC14年代測定法などから水稲農耕の開始年代が約400～500年遡ったBC9世紀(約2,800年前)頃に修正された。

一方、北海道では縄文時代晩期以降の時代区分は、弥生・古墳時代に該当する続縄文時代、飛鳥・奈良・平安時代に該当する擦文時代、そして、鎌倉以降に該当する問題のアイヌ文化期時代が始まり？近世、近代と続く。

続縄文時代は弥生時代に相当する前期と古墳時代に相当する後期に分けられ、前期は東北弥生文化の影響を受けた田舎館式土器の流れを汲む恵山式土器を伴い、後期は道央・道東の後北式土器(後期北海道薄手縄文土器)或いは江別太式土器や北大式土器を伴う。

後北式土器の分布域は、北海道全域、サハリン南部、南千島と東北、新潟平野まで広範囲に及んだがAD7世紀頃で終焉をむかえた。

AD7世紀～AD13世紀頃までが本州の土師器に類似した擦文土器に因んで名付けられた擦文時代である。

この時代は本州から鉄や土師器が流入、石器が激減し、「かまど」を伴った長方形の住居が作られ雑穀などが栽培された。

いわゆる本州スタイルの物質文化が本格的に北海道に流入し始めた時代なのである。

また、続縄文時代の後半から擦文時代の終末期にかけて北海道の北部(稚内)から東部(網走・根室・釧路)の沿岸部とサハリン南部及び千島列島などに短期間で消えた独特の大陸系オホーツク文化(AD4・5世紀～AD9世紀)が出現した。

その結果として、擦文文化とオホーツク文化との融合であるトビニタイ文化(AD9世紀～AD13世紀)が誕生した。

北海道北部やサハリン南部のオホーツク文化期の遺跡から出土した人骨の形態学的特徴としては、「オホーツク文化人は北東シベリアやサハリン、アムール川流域に住むニブフ、ウリチ、ナナイなどの民族に類似する」と報告されている。(Ishida.1988 Kozintsev.1992)

また、オホーツク文化人骨から得られたmtＤＮＡ(ミトコンドリアＤＮＡ)の塩基配列を既報の現代東南アジア・東アジア･北東アジア集団のＤＮＡと比較した結果では「特に、ニブ

フ、ウリチ、ネギタール、コリヤークの集団では各々34？44％の個体がオホーツク集団と共通したＤＮＡタイプをもっていると報告している。

また、アイヌ集団の約12％がオホーツク集団とＤＮＡタイプを共有していたとの結果も得られている。（オホーツク文化人の遺伝的特徴　増田隆一・佐藤丈寛）

つまり、遺伝学的にも形態学的にもオホーツク文化人は北東アジアのツングース系諸民族に由来すると考えられるのである。

オホーツク文化は僅か約500年で歴史に幕を降ろすが、道北、道東地域だけに限らず道南地域の奥尻島（ヘロベ島）の青苗砂丘遺跡にもその痕跡を残している。

粛慎（シュクシンまたはミシハセ）として日本書紀に登場するオホーツク文化人は、7世紀中期（658年～660年）、蝦夷（北東北と北海道南西部）に対して大船団（180隻～200隻）を率いて3度の武力侵略を試みた阿倍比羅夫を総大将とするヤマト軍と奥尻島にて交戦した。

何れにおいても、大船団のヤマトはこれといった功績も上げられぬままに撤退、粛慎に撃退された可能性を日本書記からは読み取ることができる。

アムール川（黒竜江）流域やサハリンなどから、はるばる船団を組んで大海をわたり日本海側を南下したオホーツク文化人の行動からは、同じ太陽崇拝民族が住む人間の大地（アイヌモシリ）、すなわち「蝦夷の防衛」をその主任務としていたことが判明してくる。

道東ではオホーツク文化は擦文文化と融合してトビニタイ文化を生み出したが、これらの文化を育んだ擦文時代は、AD13世紀頃の平安時代末期または鎌倉時代初期に終焉をむかえた。

そして、いよいよ本題となる「アイヌ文化期時代」が始まる。

アイヌ文化期時代の文化の特徴（13世紀～19世紀半ば）である。

① 船による大量の物資が交易され、道南に和人が住み着く。
② 鉄製鍋・漆器の椀・捧酒箸・骨格製の狩猟具などがみられ、陶器が大量に流通する。
③ 住居は竪穴式住居から平地式住居のチセに移行し、カマドが設けられる。
④ 主にヤマトとの戦闘に備えたチャシが道内全域に登場する。

アイヌ文化期はどちらかというと、特定の資料を除き和人の文化との融合から誕生しているようだ。

AD14世紀中期（1,356年）、AD13・14世紀の蝦夷（北海道）のアイヌやその周辺の原住民の習俗及び北方世界の様子について言及した資料

図15　入江貝塚公園内に復元した縄文時代後期（約4,000年前）の土ぶき竪穴式住居
（写真所蔵先：洞爺湖町教育委員会）

図16　平地式住居・チセ
ウポポイ（民族共生象徴空間）にて撮影
（北海道白老町若草町）

表4　縄文時代（早期・前期・中期・後期・晩期）、擦文時代の
５期＋２時代における住居遺跡（含む貝塚遺跡）の使用状況

遺跡総数440

	縄文時代					続縄文時代	擦文時代	遺跡数
1	早期	前期	中期	後期	晩期	続縄文	擦文	54
								計54
2		前期	中期	後期	晩期	続縄文	擦文	5
3	早期	前期	中期	後期	晩期	続縄文		18
4	早期	前期	中期	後期	晩期		擦文	13
5	早期	前期	中期	後期		続縄文	擦文	8
6	早期	前期	中期		晩期	続縄文	擦文	4
7	早期	前期		後期	晩期	続縄文	擦文	2
8	早期		中期	後期	晩期	続縄文	擦文	9
								計59
9	早期	前期	中期	後期	晩期			32
10	早期	前期	中期	後期		続縄文		2
11	早期	前期	中期		晩期	続縄文		4
12	早期	前期	中期	後期			擦文	3
13	早期	前期	中期		晩期		擦文	2
14	早期	前期		後期	晩期		擦文	1
15		前期	中期	後期	晩期	続縄文		8
16		前期	中期	後期	晩期		擦文	1
17		前期	中期		晩期	続縄文	擦文	2
18	早期	前期	中期			続縄文	擦文	5
19	早期		中期	後期	晩期	続縄文		8
20	早期		中期	後期		続縄文	擦文	4
21	早期		中期	後期	晩期		擦文	2
22	早期		中期		晩期	続縄文	擦文	6
23	早期		中期		晩期	続縄文	擦文	4
24			中期	後期	晩期	続縄文	擦文	1
								計85
そ　の　他								242
								合計440

『諏訪大明神絵詞』が成立した。

資料によると、蝦夷が千島と呼ばれた北海道には日ノモト（ひのもと）、唐子（からこ）、渡党（わたりとう）など3集団が居住していた。

渡党は渡島半島南部（函館・松前）を拠点として、対岸の津軽と頻繁に交易をしており、毛深いが和国の人と似て言葉にはなまりはある大半は通じるという。

蝦夷が鎌倉時代の流刑地であったことを考えると、渡党はその子孫またはアイヌとの混血の可能性が強い。

一方、「日ノモトと唐子」は言葉が通じないという。「日ノモト」は道東から千島列島に連なる東蝦夷地に居住していた千島系アイヌと考えられ、海獣(アザラシ・アシカなど)を捕獲し、その毛皮を主な交易品としていたようだ。

「唐子」は「唐太(カラフト)に通じることから、道北アイヌ・樺太アイヌや粛慎が考えられる。

生活は漁労が中心で、海獣などの毛皮の他、矢羽などを交易していたようだ。

『諏訪大明神絵詞』の内容からは、既にこの時代和人は北海道の奥深くを踏破、アイヌの世界に精通していたと推察できるのであった。

アイヌ文化のスタートについて、民族最大の団体である公益社団法人北海道アイヌ協会の「アイヌ民族の概説」では、『アイヌ文化形成の主な母体となったといわれる擦文文化(北海道および東北地方にわたって分布)が、12世紀半ばに変容し、土器文化の擦文文化は交易経済の発展による鉄製品や漆器などの移入により、土器に代わる容器を用いた文化内容と儀礼様式を持つ文化が12世紀末頃までに生まれた。

この文化は、アイヌ文化の構成要素と重複し、この時期にはアイヌ文様も出現している』と解説している(※詳細はアイヌ民族の概説を参照のこと)。

同アイヌ協会は、AD12・13世紀頃をアイヌ文化期の本格的スタートとしているが、その根拠が曖昧でぼかされているようだ。

また、一番肝心な民族の起源については何も触れられていないのは何故なのだろうか。

北海道では擦文時代における集団の交代がおきた証拠は見いだせず、逆に縄文早期から擦文時代までの一貫して使用した遺跡の連続性が認められる。

道内にはそれを裏付ける縄文時代5期(早期・前期・中期・後期・晩期)、続縄文時代、擦文時代の5期＋2時代において、連綿として遺跡を使用した痕跡を残す多数の複合遺跡が存在する。

縄文時代の遺跡総数約7,000(含む続縄文時代と擦文時代)の中から住居遺跡と貝塚遺跡を合算した440の遺跡(除く洞窟遺跡・海底遺跡)を対象として分析した結果、7期全てに連続性の痕跡を示す遺跡54基、6期にその痕跡を示す遺跡59基、5期にその痕跡を示す遺跡85基の計198期が存在すると判明した。

残りの242基の遺跡は4期～2期に使用の痕跡が認められる。

7期全てに痕跡を残す遺跡は、主に石狩南部(恵庭市・千歳市)と胆振(苫小牧市・洞爺湖町)の道央に集中しており、「アイヌの集団と他の集団との交代がおきていない」ことの証左となる。

ということは、縄文時代早期からアイヌ系の集団が北海道に暮らしていたことになる訳であるが、長い年月において他の集団が北海道に渡来、居住したことを否定するものではなく、その筆頭は紀元0年頃、余市のフゴッペ洞窟にその痕跡を残したオホーツク文化人であろうか。

アイヌ文化の起源をAD12・13世紀頃のアイヌ文化期に求めてもその本質は見えてこず、遥かな縄文時代に遡った精神面を含めた多様な視点からの大局的研究姿勢が求められる。

アイヌ文化の本質を探るには民族の口承文芸とアイヌ語の研究とが必要不可欠と考えられた。

そこで言語学者、民俗学者(民族学者)にして、

アイヌ語研究の創始者でもある金田一京助に解明の糸口を求めてみた。

以下に、それらの関係資料を参考にしたアイヌ文化の起源に関係する内容を列記する。

◎オキクルミカムイ(オイナカムイ)の降臨とアイヌ文化の起源◎

① 往古、国造の神(コタン・カラ・カムイ)が、蝦夷国(アイヌモシリ＝下界)と自然界(人や動植物)を創造、カントモシリ(天国＝宇宙)にも劣らない美しい世界を創造した。

② だが、ある時地上を見渡すと人々は洞窟に住み、生肉を食べ、火の扱い方も道徳も知らない、食人種さながらの非人間的生活を営んでいた。

③ その状況を憂えた天上界では、過酷(猛暑・極寒などに耐える)な試練に合格した者をアイヌモシリへ派遣、人々の救済を決定した。

しかし、多くの挑戦者は合格に至らず、唯一、オキクルミが挑戦して見事試練に打勝ちアイヌモシリへと降臨することとなった。

ハヨピラの北東側の崖を数枚撮影したところ、ハヨピラ三層の右側ポールの下方に発光するＵＦＯが捉えられた。
ＵＦＯは一枚目と二枚目に捉えられており、このオーバル状のＵＦＯはその一枚目。ハヨピラとはアイヌ語で、〝サメノキバで武装した崖〟との意味を持つ。
2025年8月3日 13:38　Canon EOS Kiss X5　55mm
f/8　1/160秒　ISO/100　撮影者　J.Nunokawa

④ 降臨に際し、オキクルミは下界には獣や魚はいるが、穀物がないことを憂いて内緒で大事な天上界の稗(ヒエ)を一掴み耐Gスーツ(または宇宙服)の膝のプロテクターにしまい込んだ。

それを見ていた犬が騒ぎだしたため、人間との会話が不可能な唖状態とし、猟犬として下界で働くよう命じた。

⑤ オキクルミはカニシンタ(黄金の飛行船＝太陽円盤)に搭乗し、カントモシリよりアイヌモシリの沙流川(古名シシリムカ)の高丘であるハヨピラ(Hai-o-pira・沙流郡平取町)に降臨した。

※Hai(ハイ)は角鮫(アイヌ語でシリカプ)の「角」の意、Ò は同「存在」または同「乗る」の意、ピラは同「崖」の意であるから、「角鮫の角が頂にある崖」となる。古老曰く「以前は角鮫の角があった」。

⑥ 下界に降臨したオキクルミは、島内のあらゆる魔神を調伏し、島に上陸する魔人を撃退した。

また、文化的技法として【火の使用方法、耕作の方法、魚と肉の調理方法、酒の造り方、機の織り方、着物の仕立て方、家の建て方、丸木舟の造り方、漁猟の方法(銛・ヤスの製造)、狩猟の方法、毒矢である附子矢(毒矢)や自動自発弓の製法及び使用方法)】などを教え、食人種の習慣を改めるよう警告した。

⑦ 神事に関することとして【イナウ(ヌサ・削りかけ)の製法と神の祭り方(ヌササン)、酒を捧げた神のへの祈り方、祭られるべき神々のいわれ、祈詩の述べ方、病を癒すべき祈祷の方法などを伝授】した。

⑧ さらには【挨拶、談判、裁判の方法や祭

唄、恋歌、アイヌの歌・結婚・遊び、男の造る物、女の造る物なども教えた】。

⑨　アイヌはオキクルミ在世の世を黄金時代としているが、時が流れるにつれオキクルミの神徳を汚し堕落した。
後年、オキクルミはアイヌに愛想を尽かしてアイヌモシリから隣国、或いはカントモシリへと帰還した。

【アイヌに愛想をつかす神徳を汚した三箇条】

★親指の背にのる稗を炊くと鍋いっぱいになる天上の稗粒を数えるという不敬。

★自動追尾式附子矢の定められた期間以外の乱用により、同附子矢はその効力を失ない雄毒もアイヌモシリから消えた。

★アイヌモシリの大飢饉に際して窓より食料(炊いたヒエ)や衣料を配給していたオキクルミ夫人の手を引っ張るという不敬。

以上、アイヌが固有の慣習、風習と信じ込んでいる文化の一切はオキクルミに淵源していると判明する。

アイヌ民族を教化した数々の功業やその特徴からオキクルミは、文化神・農耕神・英雄神・雷神(カンナカムイ＝シンタの飛行音の特徴)・アイヌラックル(半人半神＝人間の匂いのする神)・アエオイナカムイ(伝承神＝我々の万代言い継ぎ語り継ぎて忘れない神・教師)などと

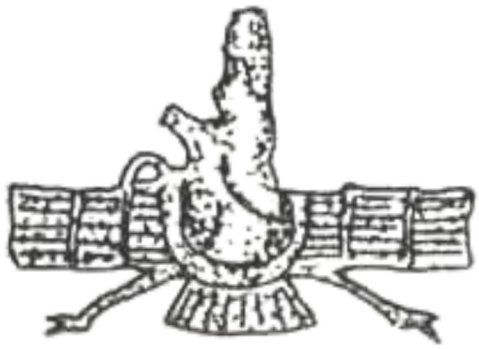


図17　アフラマツダ像(イラスト)

諸王の王となったダリウスⅠ世は「アフラマツダの神慮によりて朕はここに記せる以外の多くの業績を遺したり。・・・」と、ベヒストンの磨岩に刻む

様々に呼称される。

また、総称して『オキクルミ＝太陽神』、その搭乗機にして大空を駆け巡る太陽円盤を『シンタ』とアイヌは呼んで尊崇した。

太陽神との呼称は万物に対して平等に恵みをもたらし、その存在なくして一瞬たりとも生きられないとする燦然と輝く太陽に匹敵、或いはそれ以上の存在としてオキクルミを捉えていたことから名付けられている。

全世界の古代民族に共通した『太陽崇拝思想』或いは『太陽円盤崇拝思想』は、現代ではほぼ忘れ去られた偉大な宇宙教師への感謝と讃歌から生み出されたものである。

『アイヌ聖典』及び『イナウシロシ』などでは、太陽神、太陽円盤は円文・同心円文で表

図18　鍋田横穴の有翼太陽円盤像の壁画(左)とそのイラスト

図19　　小田良古墳　　（熊本県宇城市）熊本県立装飾古墳館

現する。

太陽神とのコンタクトの証であり正義のシンボルであるこの太陽マーク或いは太陽円盤マークは、アイヌの板綴り船である「イタオマチプ及びユキ（矢筒）」、そして全国の「装飾古墳内部」に認めることができる。

古代オリエントの世界に目を転ずるなら、ダリウス1世にコンタクトした光の神『アフラマツダ像（イラン・ベヒストンの磨岩）』の『有翼太陽円盤マーク』も同様である。

古代においてこのマークは絶対的王権のシンボルであるが故に、その正当性を誇示すべくマークの争奪戦が展開され、また多くの偽物の有翼太陽円盤マークを生み出すに至った。

つまり、古代において王権は天（宇宙）より承認されるものだったのである。

弥生時代に大陸より渡来した侵略民族ヤマトは、防衛戦を展開した原住民を武力で制圧し、オオクニヌシを援助して共に国造り（人間性の復活）を行ったスクナヒコナ神（オキクルミ）を遠ざけて、代わりに己が祖先であるアマテラスを太陽神として伊勢神宮に祀り上げた。

後世では太陽マークである「日の丸」を掲げ、その象徴とされる天皇が太陽を意味する「菊花十六紋」を皇族の紋章として採用している。

一にも、二にも己の正当性を誇示せんがためアイヌの伝承と天界（宇宙）の使者たるオキクルミとのコンタクトの記録を搾取したからに他ならず、太陽神の末裔と天孫降臨を偽証していることは明白なのであった。

内容が本題からそれてしまったので元に戻すことにする。

では、太陽神オキクルミが文化的・人間的生活の伝授と民族の教化を目的としてアイヌモシリ（北海道）へと降臨したその時期を各時代区分【縄文（早期・前期・中期・後期・晩期）、続縄文、擦文、アイヌ文化期】の中から特定してみたい。

図20　復元されたイタオマチプの船首の飾り板にシンタを意味する太陽マークの装飾。
（札幌市南区黄金湯・ピリカコタン）

❸ アイヌの口承文芸に謡われた「ヒエ」の起源

オキクルミカムイの降臨時期を示唆する「ヒエ」の出土年代

文字を持たないアイヌには当然の如く民族の記録を書き記した文献は存在しない。

彼らは大切な事柄を一字一句違えることなく、口承文芸により世代から世代へと営々と伝えてきたものが、近代の言語学者や民俗学者などにより日の目をみることとなった。

その口承文芸では文化の起源をオキクルミとしているが、残念なことにそこには天界(宇宙)からの降臨時期についての言及がない。

そこで、オキクルミが下界に君臨するにあたり天上(宇宙)より持参した穀物と呼ばれた『稗(ヒエ)』にフォーカスして考古学的視点からの考察を試みた。

考古学の年代測定法は、相対年代法と絶対年代法(放射年代法)の二種類に分類される。

・相対年代法

発掘調査による地層の堆積状況と、土器の形状や他の出土物などを比較分類して、その変遷状況からおおまかな年代を表す方法。

・絶対年代法(放射年代法)

炭素14法(14C)、カリウムーアルゴン法、ウラン―鉛法などの放射年代法を用いて具体的数値(現在から何年前)で表す方法。

半減期5,730年の14Cを用いた「放射性炭素年代測定法」が主流であるが、その中でも「AMS法(加速器質量分析法)」という測定技術の進歩により、より精密な年代測定が可能となっている。

AMS14C年代測定には、花粉、レプリカ圧痕法、炭化米、ウォーター・フローテーショ法・プラントオパールなどの試料に基づいて分析が行われている。

参考までに名古屋大学に設置された改良型タンデトロンAMSシステム(オランダHVEE社製)による14C年代測定の誤差(標準編差)を調べたところ、「10KaBPより若い年代で14Cの誤差は±20年～±40年である」。

では、多様な資料に基づいた雑穀であるアワ、キビ、ヒエはどの時代まで遡ることができるのであろうか？

雑穀(アワ・キビ・ヒエ)の起源を調べるにあたって野生種の存在が重要なポイントとなる。

アワについては、縄文時代前半の地層からはアキノエノコログサやキンエノコロは出現するが、現在日本各地に分布しているアワの野

図21　　ヒエの穂
(平取町立二風谷アイヌ文化博物館所蔵)

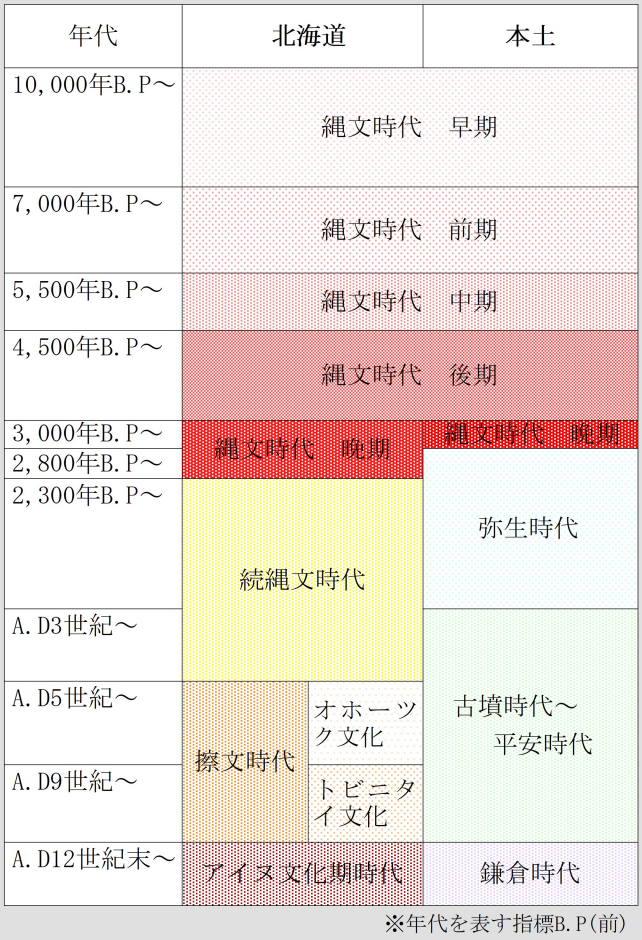


図22　　考古学的時代区分の各年代(始期と終期)

生種であるエノコログサは出現しない。

キビについては、ヌカキビ(イネ科の雑草)は自生しているが野生種自体が発見されていない。

そして、それらの炭化種子が縄文時代晩期終末頃(九州北部の弥生前期初頭)に見つかっていることから、中国で栽培化されたものがイネと共に日本に伝播したと考えられており、直接年代が測られた例としては、滋賀県竜ケ崎A遺跡の2,550年±2514C BPの値が最古であるという。

次にヒエについての専門家の見解を紹介する。日本では栽培種としてのヒエ、雑草のイヌビエとタイヌビエが知られており、日本の栽培ヒエは、インドビエとは系統が異なり、東アジアのイヌビエを祖先種とすることが確認されている(藪野,1962)。

また、縄文時代前期頃から北海道や東北地方を中心に、いわゆる「縄文ヒエ」が出土している。

これは、野生種のイヌビエとは異なり、やや同部が膨らんだヒエ属種子である［吉崎1992］。

阪本［1988］やCrawford［2002］などの指摘によると、ヒエは日本列島で独自に栽培化された可能性が高いという。

竪穴住居床面の遺跡発掘調査における炭化したイネ科植物の雑穀の検出に際して、フローテーション手法(0,425mmメッシュのスクリーンを使用する浮遊遊水選別方法)が一役買っている。

以下の遺跡からフローテーション法やレプリカ圧痕法により、『ヒエ属の種子や炭化したヒエ属穎果』が検出されている。

★ハマナス遺跡【北海道函館市川汲町・縄文時代前期後半】

★臼尻Ｂ遺跡【同函館市臼尻町・縄文時代中期】

［ハマナス遺跡およびそれに隣接する臼尻B遺跡からヒエ属の種子が検出された。しかも、時代の経過とともに増大傾向が認められる。われわれ(吉崎昌―他)の共同研究者であるトロント大学人類学部のCrawfordは、この変化に注目し、これが栽培化の過程によるものではないか、と推定している(Crawford,1983)］

★中野遺跡【北海道函館市中野町・縄文時代早期後葉の層準】［ヒエ属種子の出土の確認(吉崎,1997)］

★館崎遺跡【福島町館崎・縄文時代前期後半～中期】

［縄文時代前期後半の円筒下層式土器から大量の大型のヒエ属有ふ果(果実)の圧痕を検出］

★フゴッペ貝塚遺跡【同余市町・縄文時代中

期初頭の層準(吉崎,1992a)】

［ヒエ属種子の出土の確認(吉崎,1997)］

★塩谷3遺跡【北海道小樽市塩谷・縄文時代後期の層準(吉崎,1997)】

［ヒエ属種子の出土の確認(吉崎,1997)］

★三内丸山遺跡【青森県青森市三内・縄文時代前期後半】

［縄文時代前期後半の円筒下層式土器から大型のヒエ属有ふ果(果実)の圧痕を検出］

★富ノ沢遺跡361号住居【同六ケ所村富ノ沢・縄文時代中期末】

［大型住居の床面から2,000粒ほどの炭化したヒエ属穎果がまとまって出土している。この中にはイヌビエEchinochloa crus-galliに類するものと胴部が膨らんだ栽培ヒエに類するものの両方が見られる。(吉崎,1992a,b)

この資料のAMS年代は出土したヒエ属種子そのもので実施されたが、歴年代更正値2,407～2,270BCが得られている］

★風張遺跡【同八戸市是川・縄文時代後期末晩期初頭】

［竪穴住居の床面からイネとヒエを検出(D’A-ndrea,1992)］

★八幡遺跡【同八戸市八幡・縄文時代直後(弥生時代前期)】

［竪穴住居から確実な栽培型ヒエとオオムギ、イネなどを検出(吉崎、1992c)］

吉崎昌一(1997)は研究論文『縄文時代の栽培植物』の中で次の様に解説している。

『こうした遺跡から出土したヒエ属種子を詳細に観察すると大まかに3種類の形態、つまり(1)イヌビエに類するタイプ、(2)栽培ヒエに近い形態を示す小型のもの、(3)現生の栽培ヒエとほぼ同一の形態を示すもの、に分類される。

まだ資料は断片的であるが、時代順に縄文時代早期から前期にかけては(1)の形態が多く、縄文時代前期から中期にかけては(2)が増加し、それ以降になると(3)が卓越するらしい。

こうした状況から考えて、北海道南西部から東北地方においては、少なくとも縄文時代早期末ころからヒエ属と人間の関係が密接化し、初原的な栽培が始まっていたのではないかと推定できそうに思う。

そこで、前述の(2)～(3)のタイプのヒエ属を「縄文ヒエ」と仮称しておこう。

そして、遺跡から得られたヒエ属種子の時代的な形態的変化から見て、縄文時代前期後半にはかなり広い地域でヒエ属の粗放な農耕が始まっていた可能性があると考える。(吉崎,1995)

残された問題の一つとして、縄文時代の炭化したヒエ属種子は、ほかのイネ科植物の炭化種子と比べて、遺構からの出土数が多いことに注目したい。

当然ではあるが、土壌攪拌の機会が多い竪穴

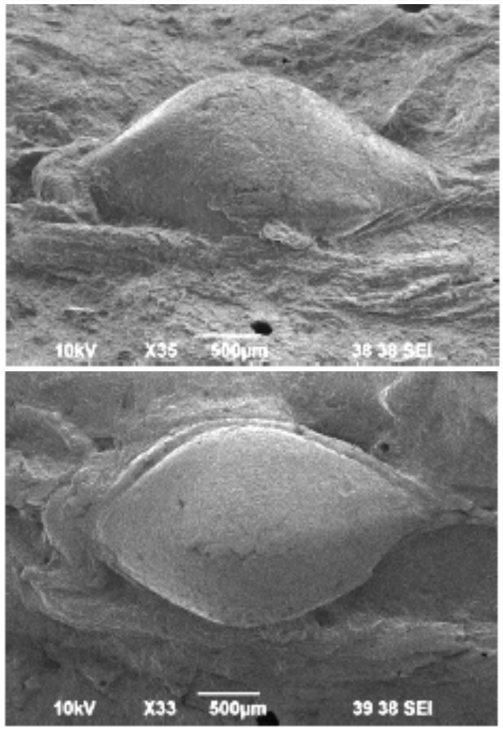
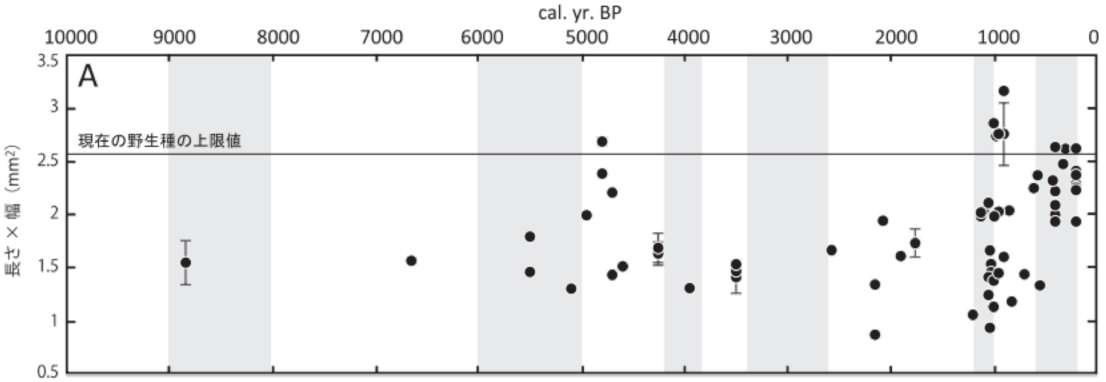


図23　土器に残ったヒエの圧痕画像
遺跡名：舘崎遺跡　出土場所：北海道福島町
年代：縄文時代前期～中期(約5,000～4,500年前)
画像：熊本大学小畑研究室提供

図2　過去10，000年間のヒエ属頴果のサイズ(長さ×幅)変化



A:ドットは各遺跡から出土した炭化頴佳果(長さ×幅)の平均値，エラーバーは標準偏差を示す.データの詳細は付録S3に示す.グレーの網掛けはMayewski *et al*.(2004)の急激な気候変化期(9000～8000,6000～5000，4200～3800，3500～2500，1200～1000，600～150 cal.yr.BP).

図24　過去10，000年間のヒエ属頴果のサイズ(長さ×幅)変化
那須　浩郎(2018)縄文時代の植物のドメスティケーション　からｐ117、図2のAを抜粋　　©日本第四紀学会

住居の周辺では、エノコログサやイヌビエなどイネ科植物が群生していたであろう。

これらの種子は、住居内に流れ込んで生活面で酸化したり、炉の周辺で炭化されたという可能性が十分に考えられる。

しかし、われわれの扱った縄文時代の竪穴住居床面の土壌からは、エノコログサなどが伴出するケースはきわめて少ないのである。

とくに、明瞭に炭化したものはまず見られない。

したがって、これまで扱った竪穴住居の資料に関する限り、イネ科植物の中では、ヒエ属種子(縄文ヒエ)が選択的に利用されていたことになろう。

これがヒエ問題を解く考古学的な鍵だと考える・・・』と解説している。

一方、那須浩郎(2017)は『縄文時代の植物のドメスティケーション』の研究論文の中で次の様に解説している。

『日本列島でも縄文時代に野生のイヌビエのドメスティケーション(栽培化)が起きていたとしたら、縄文時代でもヒエを主体とした雑穀農耕社会が存在してもよさそうであるが、そうはならなかった。

イヌビエとヒエを含むヒエ属種子の最古の記録は、これまでのところ、縄文早期の北海道渡島半島、中野B遺跡で見つかっている。(図2,付録S3)

炭化種子(穎果)のサイズ変化を長さと幅の積で比較すると、縄文早期の資料はまだ小さく、現在の野生種イヌビエと同じ程度である。

ところが、4,700年前頃(縄文中期頃)に現在の野生種の上限値を超える炭化種子が突如現れる。

これを発見したCrawford(1983)は北海道、渡島半島南東部の亀田半島の遺跡群において、日本で初めてフローテーション法を導入し縄文時代前期から中期にかけてのヒエ属の種子が大型化していることを見出し、ヒエのドメスティケーションが起きていた可能性を始めて指摘した。

その後、吉崎昌一は、北海道や東北北部の遺跡においてフローテション法による炭化種子の分析を精力的に進め、イヌビエよりも丸みを帯びた種子を多数見出し、「縄文ヒエ」と名づけ、その栽培の可能性を指摘している。

このようにヒエ属の種子は、少なくとも北海

表5

S3　　過去10，000年間のヒエ属頴果のサイズ(長さ×幅)変化　データの詳細

遺跡名	地域	時期	炭素年代 最大値 (calBP)	炭素年代 最小値 (calBP)	炭素年代 中央値 (calBP)	個数	長さ 平均 (mm)	長さ SD (mm)	幅 平均 (mm)	幅 SD (mm)	厚さ 平均 (mm)	厚さ SD (mm)	長さ×幅 平均 (mm^2)	長さ×幅 SD (mm^2)	長さ／幅 平均	長さ／幅 SD	文献
中野B	北海道，函館市	縄文早期	9136	8545	8841	10	1.35	0.21	1.14	0.15	0.56	0.05	1.56	0.43	1.18	0.09	吉崎(1997b)
石倉貝塚	北海道，函館市	縄文前期初頭	6950	6350	6650	1	1.5		1.05		0.5		1.58		1.43		椿坂(2007)
ハマナス野	北海道，南茅部町	縄文前期	5650	5350	5500	147	1.50		1.20				1.80		1.25		Crawford (1983)
ハマナス野	北海道，南茅部町	縄文前期末	5650	5350	5500	1	1.4		1.05		0.55		1.47		1.33		椿坂(2007)
ブゴッペ貝塚	北海道，余市町	縄文前期末－中期末	5650	4550	5100	2	1.25		1.05		0.53		1.31		1.19		椿坂(2007)
鳴川右岸	北海道，七飯町	縄文中期中葉	5050	4850	4950	1	1.6		1.25		0.75		2.00		1.28		椿坂(2007)
大船C	北海道，南茅部町	縄文中期	5050	4550	4800	2	1.83	0.04	1.48	0.18	0.78	0.18	2.69	0.27	1.25	0.17	吉崎・椿坂(1998a)
大船C	北海道，南茅部町	縄文中期中葉－末	5050	4550	4800	3	1.73		1.38		0.78		2.39		1.25		椿坂(2007)
臼尻B	北海道，南茅部町	縄文中期	4850	4550	4700	182	1.70		1.30				2.21		1.31		Crawford (1983)
臼尻B	北海道，南茅部町	縄文中期末	4850	4550	4700	4	1.36		1.06		0.63		1.44		1.28		椿坂(2007)
野場5	青森県，階上町	縄文中期後半－後期初頭	5050	4150	4600	1	1.45		1.05		0.55		1.52		1.38		椿坂(2007)
富ノ沢(2)	青森県，六ヶ所村	縄文中期	4521	3990	4256	39	1.41	0.11	1.16	0.11			1.64	0.23	1.22	0.11	住田ほか(2008)
富ノ沢(2)	青森県，六ヶ所村	縄文中期	4521	3990	4256	50	1.47	0.14	1.14	0.10	0.63	0.10	1.69	0.28	1.29	0.09	吉崎・椿坂(1992)
八木B	北海道，南茅部町	縄文後期	4550	3350	3950	2	1.28		1.03		0.5		1.32		1.24		椿坂(2007)
キウス4　R地区	北海道，千歳市	縄文後期	3650	3350	3500	50	1.35	0.15	1.044	0.09	0.619	0.09	1.42	0.26	1.30	0.12	吉崎・椿坂(1998b)
キウス4　R地区2	北海道，千歳市	縄文後期後葉	3650	3350	3500	30	1.38		1.07		0.67		1.48		1.29		椿坂(2007)
キウス4遺跡	北海道，千歳市	縄文後期後葉	3650	3350	3500	50	1.4		1.1		0.66		1.54		1.27		椿坂(2007)
八幡	青森県，八戸市	弥生時代前期？	2750	2400	2575	8	1.43		1.17		0.69		1.67		1.22		椿坂(2007)
H-317	北海道，札幌市	続縄文時代初頭	2450	1850	2150	50	1.09		0.81		0.43		0.88		1.35		椿坂(2007)
H-317	北海道，札幌市	続縄文時代初頭	2450	1850	2150	50	1.34		1.01		0.53		1.35		1.33		椿坂(2007)
青苗B	北海道，奥尻町	続縄文時代初頭－前葉	2450	1700	2075	1	1.5		1.3		0.7		1.95		1.15		椿坂(2007)
K435　第2次調査	北海道，札幌市	続縄文時代	2450	1350	1900	3	1.47		1.1		0.42		1.62		1.34		椿坂(2007)
茂別　(H-9)	北海道，上磯町	続縄文	1894	1628	1761	50	1.472	0.13	1.179	0.09	0.694	0.10	1.74	0.24	1.25	0.11	吉崎・椿坂(1997)
K39　第8次調査	北海道，札幌市	擦文文化前期	1350	1050	1200	25	1.20		0.89		0.53		1.07		1.35		椿坂(2007)
山元(3)	青森県，浪岡町	平安時代(9世紀末)	1100	1150	1125	8	1.63		1.22		0.7		1.99		1.34		椿坂(2007)
有戸鳥井平(4)	青森県，野辺地町	平安時代(9世紀末)	1100	1150	1125	1	1.50		1.35		0.8		2.03		1.11		椿坂(2007)
ユカンボシC2遺跡群	北海道，千歳市	擦文文化(9世紀)	1150	1050	1100	24	1.51		1.35		0.87		2.04		1.12		椿坂(2007)
K39　第6次調査	北海道，札幌市	擦文文化前期-中期初頭 (9-10世紀)	1150	950	1050	50	1.32		0.95		0.58		1.25		1.39		椿坂(2007)
K39　第6次調査	北海道，札幌市	擦文文化前期-中期初頭 (9-10世紀)	1150	950	1050	50	1.38		1.03		0.56		1.42		1.34		椿坂(2007)
野木	青森県，青森市	平安時代(9－10世紀)	1150	950	1050	4	1.64		1.29		0.73		2.12		1.27		椿坂(2007)
H-317	北海道，札幌市	擦文文化 (9世紀末-10世紀前半)	1070	1000	1035	50	1.44		1.16		0.73		1.67		1.24		椿坂(2007)
K39　長谷工地点	北海道，札幌市	擦文文化中期前半－後半 (9世紀末-10世紀前半)	1070	1000	1035	50	1.17		0.81		0.47		0.95		1.44		椿坂(2007)
K39　長谷工地点	北海道，札幌市	擦文文化中期後半 (10世紀前半)	1050	1000	1025	7	1.39		1.11		0.69		1.54		1.25		椿坂(2007)
K39　管財課地点	北海道，札幌市	擦文文化中期前半 (10世紀初頭前半-前半)	1050	1000	1025	20	1.41		1.04		0.58		1.47		1.36		椿坂(2007)
K435	北海道，札幌市	擦文文化早期前半－後半, 中期後半－後期	1350	650	1000	30	1.27		0.9		0.52		1.14		1.41		椿坂(2007)
K39　第7次調査	北海道，札幌市	擦文文化中期初頭－前半	1050	950	1000	18	1.36		1.02		0.57		1.39		1.33		椿坂(2007)
津寺　丸田調査区	岡山県，岡山市	10世紀	1050	950	1000	5	1.92		1.49		0.92		2.86		1.29		椿坂(2007)
切田前谷地(2)	青森県，十和田市	平安時代中期 (10世紀中頃)	1010	980	995	2	1.53		1.3		0.78		1.99		1.18		椿坂(2007)
内蝦沢蝦夷館	青森県，東北町	平安時代後期 (10世紀後半)	1000	950	975	8	1.93		1.42		0.96		2.74		1.36		椿坂(2007)
K440	北海道，札幌市	擦文文化中期	1050	850	950	30	1.39		1.05		0.55		1.46		1.32		椿坂(2007)
往来ノ上(1)	青森県，東北町	平安時代	1150	750	950	30	1.54		1.32		0.88		2.03		1.17		椿坂(2007)
上野	岩手県，一戸町	平安時代	1150	750	950	2	1.78		1.55		0.98		2.76		1.15		椿坂(2007)
高屋敷館　(74H 竈)	青森県，浪岡町	平安後期 (11世紀)	950	850	900	50	1.897	0.29	1.424	0.22	0.806	0.15	2.76	0.77	1.33	0.08	吉崎・椿坂(1998c)
サクシュコトニ川	北海道，札幌市	擦文文化 中期前半－後期前半	1050	750	900	40	1.49		1.08		0.6		1.61		1.38		椿坂(2007)
高屋敷館	青森県，浪岡町	平安時代(11世紀頃)	950	850	900	50	1.94		1.63		0.97		3.16		1.19		椿坂(2007)
K501遺跡	北海道，札幌市	擦文文化中期-後期	1050	650	850	11	1.56		1.31		0.87		2.04		1.19		椿坂(2007)

那須　浩郎(2018)縄文時代の植物のドメスティケーション
電子付録S3から抜粋して着色した　　©日本第四紀学会

◎ 稗（ヒエ）と神酒 ◎

日本では縄文時代の前期頃から冷涼な北海道と東北地方で栽培されていた。精白粒にはミネラル(マグネシュウム、リン、カリウム、亜鉛、鉄など)やビタミン、食物繊維が豊富に含まれ非常に優れた栄養価値がある。
明治時代までは東北地方の山間部や関東地方の畑作地帯などをはじめ全国的に主食用として栽培されていた。
アイヌにとっては、最も重要な主食穀物がヒエであり、遥かな古来より神事(カムイノミ)、祭礼(イチャルパや法要祭)、儀式(イオマンテや新築祝)などに用いる酒、トノトはヒエで醸造されている。
また、石川県白山周辺ではどぶ酒(どぶろく)を醸造し、岩手県北上山地ではヒエから麹を作り、味噌、醤油、甘酒の醸造原料としている。
このヒエは口承文芸によれば、オキクルミカムイがアイヌのために天上より持参し授けたものであるという。

道南西部から東北北部の円筒式土器文化圏(渡辺1982)において、縄文前期～中期にかけて大型化していた可能性がある・・・しかしながら、縄文時代後期以降、平安時代まではヒエ属の大型種子が見つかっておらず、縄文時代を通して大型種子が継続した様子は見られない。

椿坂がまとめた詳細なサイズデータによれば(椿坂,2007)、ヒエ属種子が、現代の栽培種のヒエと同程度の大きさになり、その出現頻度が定着するのは、およそ1,000年前の平安時代後半頃であるという。(図2. 付録S3)

興味深いことに、この時期に朝鮮半島北西部、中国大陸北西部、沿海州南部でも大型のヒエ属種子の利用が始まる。(Zhao,2016)

東北アジアのどこかの地域で大型化したヒエが一気に各地に拡散した可能性がある。

中国の古い文献では、魏(AD220～265年ごろ)の武帝が農業の役人に銘じてヒエを作らせていたという記述があり、新羅の軍糧を貢納させた際の木簡には「稗」の文字が記されている。(藪野,2001)

日本では、奈良時代の正倉院の尾張国に関わる正税帳には稗を表す文字が書かれており、当時の税として稗が納められていたことがわかる。(藪野2001)

したがって、少なくとも日本の弥生時代頃(約2,000年前)には中国や朝鮮半島でヒエは栽培されており、日本では遅くとも奈良時代には栽培されていた可能性が高い。

そうすると、約2,000年前に本格的にヒエの栽培が始まってから約1,000年かけて種子が大型化したのか、あるいはどこかで短期間のうちに大型化した品種が平安時代頃に北東アジア全体に一気に広まったのかは、今後の検討課題である』と解説している。

また、ヒエのドメスティケーションについては、『中国長江流域や黄河流域ではイネやアワ、キビにはドメスティケーションの証拠が認められるが、イヌビエには認められていない。

このことから、何らかの遺伝的或いは整理・生態的な理由で、イヌビエのドメスティケーションはイネやアワ、キビに比べて難しかったのではないかと考えている』という。

フローテーション法およびレプリカ圧痕法などで検出したヒエ属(炭化種子や穎果)に関した専門家たちの調査・研究内容や他のデータ

◎ 稗（ヒエ）の酒ドブ酒について ◎

土地柄より水田にとぼしく、またこの土地に移住してきた人たちは畑作に馴れた人達であったと思われる。
人々は我が国の原始時代の人達とおなじように水田式によって、山を開き薙畑を作り、そこに稗・粟・大豆・小豆・そばなどをうえたので、主食としては稗と粟が広く用いられた。
p40 清酒の他に稗の実で造ったドブ酒やオオイブの汁がある。
〔白峰村史(現石川県白山市) 上巻　第四節　衣食住の変遷　二、食生活p386～　主食(主食のあらまし)〕

の分析から以下の内容が判明する。

①現時点でのヒエ属(イヌビエ)の最古の検出記録は縄文時代早期後葉(約8,800B.P)頃の北海道・函館市中野B遺跡である。

②北海道南西部及び東北北部の縄文時代前期～同中期にかけての遺跡から、東北その他の地域の栽培型のヒエとは異なった様相を呈する大型化したいわゆる「縄文ヒエ」を検出する。

③縄文早期から前期、中期、後期の種子の検出エリアは円筒式土器文化圏と重複する。

④同文化圏において、ボディーにフィットした耐Gスーツの着用を想起させる中空土偶や合掌土偶(座像土偶)が出土している。

⑤縄文時代前期(6,000B.P)～中期(4,000 B.P)にかけて、国内では現在のダイズやアズキのドメスティケーション(種子の大型化・栽培化)の可能性が指摘される。

⑥縄文時代後期後葉から同晩期末(弥生時代前期)の約900年間ではヒエの種子は検出されていない。(2,018年現在)

⑦縄文時代後期以降、平安時代中期頃（ 約1,000B.P)まで大型化したヒエの種子は検出　されていない。

⑧ヒエ属ではドメスティケーション(種子の大型化・栽培化)は起こらなかったようだ。

専門家のヒエに関する多様なデータを参考にすると、その大型化は縄文時代中期中葉（約5,000 B.P)に1,8mmであったが、直後の縄文時代中期中葉(約4,800B.P)頃では2,69mmに増大して縄文時代を通じて最大値に到達する。

図25　　能登比咩神社御由緒書の碑
(石川県鹿島郡中能登町) 写真提供：能登比咩神社

だが、その直後の縄文時代中期後葉には2,21mmへと減少、そして縄文中期末～後期初頭(約4,700～4,600 B.P)にかけて1,44mm～1,52mmへと減少に転じて縄文時代早期のイヌビエの大きさに逆戻りしている。

このようなヒエの種子の大きさの極端な変動に対して当惑せずにはいられない。

ひょっとして、縄文中期初頭にヒエ問題に影響をおよぼす重大な事件が発生したのであろうか、と考えて口承文芸にヒントを求めたところヒエに関連した2件の重大事件が浮上した。

その1：親指の背にのるヒエを炊くと鍋いっぱいになるという天界よりオキクルミが持参した神のヒエを、アイヌが不敬にも数えたことでヒエの特殊な効力が失われてそれ以後、前のようにヒエを炊いても鍋いっぱいになることはなかっ

◎ 能 登 比 咩 神 社 御 由 緒 書 ◎

『(能登比咩神)太古大己貴命、小彦名命と共に天下を経営し、越の八国を平け給う時、此の地に至り国津神を求め給う、ここに手玉母由良に機織乙女あり、命機殿に来たり、御飯を語り給いければ、乙女、稗粥とどぶろくを進む、命甚く愛で坐して、永く吾苗裔と爲さむと宣り給う。
此　乙女を能登比咩神と稱へ奉る、比咩神　常に女巧を重し、自ら機杼を作り、妙依を製して天尊に供え玉う後、機杼を海中に投し玉ひしに一島忽然として生る、名を能登比咩織り島、又名機貝島と言う、羽咋郡富来沖にあり。』

◎ 能 登 比 咩 神 社　社 伝 ◎

『大己貴命が当地を巡行した折り、乙女が濁酒(ドブロク)と神粥を献上したところ、命はこれを賞して、わが苗裔たれといい、乙女はこれに答えてわれに兄神あり、ともに苗裔たらしめよといった。』

た。

その2：飢饉時において、炊いたヒエの椀を窓越しに配っていたオキクルミ夫人に対して、その容姿に興味を惹かれたアイヌの若者が、夫人の腕を掴み強引に引きずり込もうとして許しがたき暴挙を働いた。

直後、その家の上空で巨大な雷鳴が轟きアイヌの若者は屋根もろとも吹き飛ばされ、それと同時にオキクルミの家と夫妻が消えてしまったという。

「その2」の事件が決定的要因となり、オキクルミはアイヌモシリより隣国へ去った、或いはカントモシリ(宇宙)へ帰還したともいわれている。

計り知れない恩恵を受けていながらその恩を仇で返すという言語道断の非人間的行為により、アイヌモシリから人間性が失われたのである。

口承文芸によると『オキクルミは神の国から持ってきた、ひとつかみのヒエの種を、たくさん増やして、国中のアイヌの人たちに分け与えました。アイヌの人たちは、はじめて、おいしいヒエごはんを食べられるようになりました。

オキクルミは、このヒエを使って、お酒を造ることも教えました。アイヌの人たちは、おいしいお酒を作ると、ヤナギの木で、イナウを作り、神さまをお祀りしました。』という。

この伝承は、オキクルミによるヒエ栽培が事実であったことを物語っており、アイヌがオキクルミの指導の下ヒエ栽培を行っていたことを示唆している。

縄文時代前期から中期初頭にかけて大型化した「縄文ヒエ」が検出されたが、縄文時代を通して大型種子が継続して出土する状況は見受けられない。

現代の栽培種と同程度の大きさになるのには平安時代中期(約1,000B.P)頃まで待たなければならないのである。

縄文時代中期中葉(約4.800B.P)頃に最大値となった縄文ヒエの種子は、約100～200年後には縄文早期のイヌビエの大きさに逆戻りした様相が伺える。

オキクルミのアイヌモシリからの退去とヒエの種子が小型化、或いは退化していく状況は、複雑に相関しているのではないだろうか。

口承文芸が示唆するように、天界のヒエ(縄文ヒエ)は我々人類が想像すらできない特殊な効力を秘めており、オキクルミの退去によりその効力が失われ小型化したとみることもできる。

米田優子は、アイヌに関連する言語学者及び民俗学者などの多様な研究データを参考、引用し、主要コンテンツとして、

Ⅰ　ヒエ、アワに関する従来の論述

Ⅱ　起源説話の検証 (1)～(3)

◎アイヌに文化をさずけたオキクルミカムイ　－日高管内平取町－ ◎

ずっと昔、神様が、アイヌモシリ(北海道)を作ったころです。神様たちが、それは、それは、緑美しい山だ」「それは、それは、澄んだ美しい流れの川だ」などと、新しくできた、アイヌモシリの話をしていました。

「よし、その国へ行ってみよう」と、勇気と知恵と力のある、若い神さまのオキクルミは、ひとつかみのヒエの種を手にすると、下界へ降りていきました。

それは、美しい沙流川が、ゆうゆうと流れている今の平取の辺りでした。

「なるほど、これは、天上で聞いていた話より素晴らしい国だ。この地で自分の力を試してみたい」若い神さまのオキクルミは、山や川の美しさと、そこに住む、優しいアイヌの人たちに感激して、いいました。アイヌの人たちは、大変喜びました。

オキクルミは、まず初めに、火のつくり方を教えました。石と石とをぶつけて火花をツクリ、サルノコシカケを燃やすと炭が出来、火種になるのです。今まで、山火事でもなければ、火をつくることはできないもの、と思っていたアイヌの人たちは、驚きました。
次にオキクルミは、柱を立て、自由に立って歩くことのできる家の作り方を、教えました。
今までは、三本柱を立てた、竪穴式の家だったので、アイヌの人たちは、家族が気持ちよくすめるようになって、大変喜びました。
また、オキクルミは、シカやクマを獲る弓と矢、トリカブトという木の根で作る毒、それにサケやマスの捕り方や道具のことも教えてやりました。
これで、アイヌの人たちは、山や川の獲物を、たくさん獲ることができ、食べ物に困ることがなくなりました。

オキクルミは神の国から持ってきた、ひとつかみのヒエの種を、たくさん増やして、国中のアイヌの人たちに分け与えました。アイヌの人たちは、はじめて、おいしいヒエごはんを食べられるようになりました。
オキクルミは、このヒエを使って、お酒を造ることも教えました。アイヌの人たちは、おいしいお酒を作ると、ヤナギの木で、イナウを作り、神さまをお祀りしました。

アイヌの人たちは、イナウのつくり方も、お祀りの仕方も、オキクルミに教えてもらった通り、立派にやりました。
オキクルミが、「神を大切に祀ると、神々が喜んで、アイヌを守ってくれるのです」と、教えてくれたからです。

オキクルミのおかげで、アイヌの人たちの生活は、たいそう豊かになりました。
「オキクルミカムイ、ありがとうございます」「オキクルミカムイ、いつまでも、このアイヌモシリにいてください」

オキクルミは、神の国に帰らず、ずっと、この国に住むことにしました。
沙流川のほとり、オタス(平取町荷負村)に新しい家を建て、美しいお嫁さんを迎えました。そして、何年も何年も、平和なのどかな日が続きました。

ところが、ある年の冬のことです。
どうゆう訳か、毎日、毎日、雪が降り続き、野も山もアイヌの家も、すっぽり雪で埋め尽くされてしまったのです。大変なことになってしまいました。アイヌの人たちにとって、一番大切な食べ物であったシカが、大雪のため、どんどん死んでいくのです。やっと雪が解け、春になりましたが、もう、一頭のシカも見つけることができませんでした。
野山じゅう、シカの死がいだらけになっていたのです。わずかな蓄えも食べつくしたアイヌの人たちは、飢えに苦しみ、病人が大勢でました。死人の出る村もありました。

オキクルミは、自分の食べる分を減らして、蓄えてあった、干したシカの肉やサケを、そっと配って歩きました。夜になると、オキクルミの妻も、ヒエのごはんを炊いてお椀に盛り、そっと家々の窓を開けて、配って歩きました。村の人たちは、姿の見えない神さまのめぐみを、心から感謝して受け取りました。

ところが、ある日、シケレベ(平取町荷負本村)の若者が、オキクルミの妻がお椀を差し出した時、いきなりその美しい手を握ってしまいました。その瞬間、ものすごく大きな音が響き渡って、若者は、吹き飛ばされてしまいました。

このことがあってから、沙流川のオタスにあったオキクルミの家が、無くなってしまいました。アイヌの人たちは、オキクルミが怒って神の国に帰ってしまったのだ、と思いました。
この時、オキクルミの妻が使っていた〝み〟(ヒエを収穫する時などに使う道具)が、岩になって残りました。

その〝み〟の岩は、ちょうど川のふちに、崖の形(アイヌ語でノカビラ)になっていました。アイヌの人たちは、この川のことを、ノカビラ川と名付けました。アイヌのために、たくさんのことを教えてくれた文化の神さま、オキクルミと、その心優しい妻にいつまでも感謝の心を忘れないようにするためです。

ノカビラ川は、今は額平(ぬかびら)川(沙流川の支流)と呼ばれ、七色の虹のように輝く川底の石を映し、沙流川にそそいでいます。

出典　北海道の伝説　北海道郷土教育研究会編　日本標準発行

Ⅲ 穀物表現におけるアイヌ語と日本語(1)～(3)

おわりに

などについて「オキクルミ－天界－ヒエの起源説話」という口承文芸が、非常に不確実な要素を含んだものであると「アイヌ農耕史研究にみられる伝承資料利用の問題点－穀物の起源説話に関する検討を中心に―」の文中で論じている。

おそらく①ヒエに対応するアイヌ語amamが主に穀物として和訳されていること　②11世紀以前の遺構から栽培種のヒエ種子が検出された例が今のところないという考古植物学的データがその論拠になっているようだ。

口承文芸に基づけば太古の昔、日本列島にアワ、キビなどの穀物は存在せず、穀物と言えばヒエpiyapa：ピヤパ)一種類だけであったと推定される。

したがって、ヒエにamam：アマンを使用するのは至極当然なのである。

穀物という単語(言葉)は和人との接触が起源であり、元々amamはamamaと同義語で和語の「まんま・飯・ご飯」という意味として使用していたようだ。

我々が食事に際し「コメを食べる」ではなく「飯を食べる」というようにアイヌの人々も「ヒエを食べる」ではなく「ご飯を食べる」即ち〝主食の穀物〟という意味合いでamamを使用していたのではないだろうか。

図26　万歳楽土で使用する祝い棒(削り掛)
(石川県輪島市門前町)　　写真提供：櫛比神社

古代のアイヌの人達にとっては、amam=ご飯＝ヒエ、アワ、米であった筈で、後にamamが穀物と和訳されるようになったと考えられる。

元々のamamの用いられ方からすると、ヒエにamamが多様化されても「オキクルミ－天界－ヒエの起源説話」という口承文芸が、『非常に不確実な要素を含んだものである』との見解にはならないのではないだろうか。

考古植物学的データに基づけば、確実な現生タイプのヒエが明らかに認められるのは、青森県八戸市の八幡遺跡（縄文時代直後）の約2,300 B.Pである。

また、人が関与した可能性が示唆されている縄文時代前期から中期にかけての「縄文ヒエ」も検出されている。

つまり、オキクルミを主人公としたヒエの起源説は11世紀を遥かに遡ることになるのである。

アイヌの口承文芸は、天界及び太陽神オキクルミカムイとのコンタクトを物語る民族の偉大な歴史であり、至宝であり、魂ともいえるアイディンティ、それがアイヌの口承文芸なのではないだろうか。

オキクルミの存在なくしてアイヌの口承文芸は生まれてこないのである。

ヒエの考古植物学的知見に基づくと、オキクルミの『アイヌモシリ降臨の時期は縄文時代前期頃、アイヌモシリを退去したのは縄文時代中期後葉頃であった』との答えが導き出された。

また、ヒエの文化圏と奇妙にもオーバーラップする円筒式土器文化圏は、オキクルミがもたらした可能性が指摘される。

次に、大型魚類や海獣猟などで使用する漁具の銛頭の起源について考察する。

❹

アイヌの口承文芸に謡われた海獣狩猟具の「雌型銛頭」の起源

ヒエ同様に考古学的視点での考察からオキクルミの降臨時期を特定する重要な資料が銛頭である。

銛は、槍やヤスなどと同じく柄(シャフト)に装着する刺突具であり、水域での狩猟において獲物を仕留めると同時に仕留めた獲物を回収する役目をも担っている。

槍やヤスは先端部と柄が一体化しているが、銛はその先端に装着された銛頭と柄(シャフト)が綱で結ばれ、銛頭が獲物の体内に残りダメージを与える仕組みである。

銛頭から伸びた綱は柄や浮袋に繋がり海獣を仕留めるための抵抗体及び海面での目印となる。

銛頭の機能としては、刺突・離頭・抵抗・繋留の4つに整理されているが(前田1974)、高橋はこれらに固定機能を追加している。

① 固定機能　銛頭が枝に固定される

② 刺突機能　銛頭が獲物に刺さって獲物の体内に入る

③ 離頭機能　銛頭が柄から外れる

④ 抵抗機能　銛頭が抵抗を受けて獲物の体内に留まる

⑤ 繋留機能　銛頭が繋索により狩猟者ないし浮き袋などに繋ぎ留められる

日本列島周辺には海獣と呼ばれる海生哺乳類(イルカ、クジラ、アシカ、アザラシ、オットセイ、トド、セイウチ)や大型表層魚であるマグロ、スズキなどが生息しているが、これらの海獣や大型表層魚を仕留めるのを目的として製作された狩猟具が銛である。

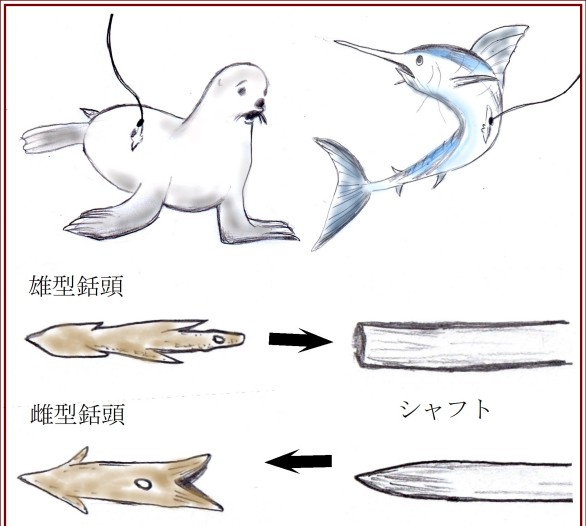


図27　銛頭 雄型・雌型の比較

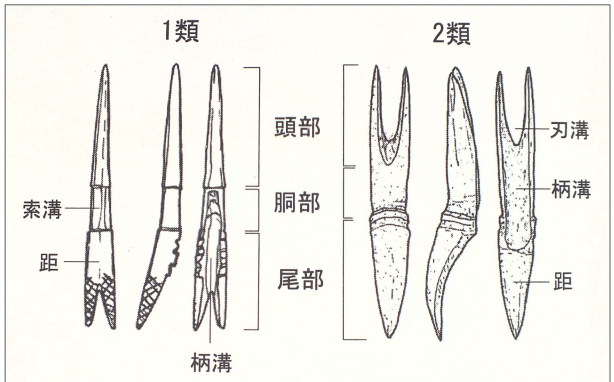


図4　銛頭の分類と各部分の名称

図28　図4銛頭の分類と各部分の名称
出典：日本列島における銛猟の考古学的研究：28
高橋 健(2008)北海度出版企画センター

銛は、銛頭・中柄・柄・繋索・柄結縛紐などで構成され、銛頭は骨格製(鹿や海獣骨)の素材が使用されていた。

特に北海道の海岸線や東北太平洋岸(三陸海岸・仙台湾)の遺跡から古い年代の骨角製銛頭が出土する。

東北以南では神奈川県三浦半島、東海地方、西日本(山陰地方と西北九州)などの遺跡からも出土する。

海外では、銛頭は北太平洋沿岸部の漁労文化に顕著に認めることができる。

例えば、①極東地域(日本列島・朝鮮半島・ロシア沿海州内陸のアムール川流域)　②オホーツク海沿岸地域(サハリン・オホーツク海北岸・カムチャッカ半島及び千島列島)③ベーリング海・チュクチ海沿岸地域　④カナダ北西海岸地域 などであるが、一部重複する地域もあり、さらに細分化される。

銛頭は、その基本的形態の相違から「雄型銛頭」と「雌型銛頭」に二分され、その形状も年代や出土地域により様々(1類・2類)である。

北海道・東北に限らず雌型銛頭は全国的に分布している。

▽雄型

銛頭の基部と柄を固定するソケット(窩)が柄に製作されており、銛頭下端部が尖っている。

本来的に「回転」・「反転」するようには作られてはおらず、それが獲物の体内から抜けないように逆刺(逆鉤)などがつけられている。

▽雌型

銛頭の基部(下端部)と柄または先柄(中柄)を固定するソケット(窩)が基部に製作されており、そこに中柄・柄が挿入され、獲物の体内に刺さった銛頭に装着した紐を引くと銛頭が回転する。雌型銛頭は回転銛頭とも呼ばれる。

雄型同様に雌型にも逆刺を有するものもある。

雌型におけるソケットの形状は盲孔である閉窩式(非開窩式)と開窩式とが存在する。

◎北海道・東北の銛頭◎

北海道では6つの地域【オホーツク海沿岸(含む礼文島)・道東太平洋岸(釧路川下流)・勇払平野周辺・噴火湾沿岸・日本海沿岸・津軽海峡沿岸】に大別された35ヶ所の遺跡から縄文

◎北海道

★早期後半　分　　布【オホーツク海沿岸】
　　特　　徴【東釧路Ⅲ式土器を伴う・海獣肋骨を柳葉型に切り出し】
　　名　　称【網走湖底遺跡】

★前期前半　分　　布【同北部（礼文島）オホーツク海沿岸・道東太平洋岸・※勇払平野】
　　特　　徴【東釧路型　海獣骨製2類・※長七谷地型　鹿角製１類銛頭】
　　遺跡名称【船泊・日の出・トコロ貝塚・大曲洞穴・網走湖底？・東釧路貝塚・緑ヶ丘・天寧・※美々貝塚】

★前期後半　分　　布【噴火湾沿岸・津軽海峡沿岸・勇払平野・津軽海峡沿岸】
　　特　　徴【北黄金型・長七谷地型・1類及び2類・鹿角製・海獣骨製】
　　遺跡名称【美々貝塚・静川22・サイベ沢・北黄金貝塚・コタン温泉の各遺跡】

★中期前半　資料欠落

★中期後半　分　　布【日本海沿岸・噴火湾沿岸】
　　特　　徴【茶津貝塚型・トコロ型1類　東釧路型及び北黄金型は海獣骨製2類】

遺跡名称【トコロ貝塚・幣舞・入江貝塚・栄磯岩陰・茶津貝塚・フゴッペ貝塚・天寧１】

★中期末～後期初頭

分　　布【噴火湾沿岸・津軽海峡沿岸】

特　　徴【戸井型・1類が主・2類】

遺跡名称【入江貝塚・高砂貝塚・ポンマ・戸井貝塚・湯川貝塚・コタン温泉】

★後　　期　分　　布【道北部(礼文島)・勇払平野・日本海沿岸】

特　　徴【船泊型・茶津洞穴型・入江型・１類・2類

遺跡名称【船泊・美々4・入江貝塚・茶津２号洞穴・栄磯岩陰・稲倉石岩陰】

★晩　　期　分　　布【道東太平洋岸・勇払平野・噴火湾沿岸・日本海沿岸・津軽海峡沿岸】

特　　徴【三ツ谷型・久根別型・緑ヶ岡型・１型・2型】

遺跡名称【緑ヶ岡・柏原5・ママチ・高砂貝塚・有珠モシリ・岩陰遺跡(栄磯岩陰・三ツ谷貝塚・久根別)】

◎東　北

★早期後半　分　　布【八戸湾沿岸】

特　　徴【開窩式銛頭・鹿角製1類・主に赤御堂式土器と多種類の骨角器、貝類を伴う】

遺跡名称【赤御堂貝塚・長七谷地貝塚】

★前　　期　分　　布【日本海沿岸・陸奥湾沿岸・小川原湖沿岸・八戸湾沿岸・宮古湾沿仙台湾沿岸】

特　　徴【開窩式銛頭・鹿角製1類】

遺跡名称【オセドウ貝塚・三内丸山・東通ノ上・唐開地貝塚・長七谷地貝塚一王寺貝塚・赤御堂貝塚・崎山貝塚・鍬ヶ崎館山・大木囲貝塚】

★中　　期　分　　布【小川原湖沿岸】

特　　徴【　　】

遺跡名称【二ッ森貝塚】

★晩　　期　分　　布【日本海沿岸・陸奥湾沿岸】

特　　徴【　　】

遺跡名称【亀ヶ岡・大浦貝塚】

時代の銛頭が出土する。

オホーツク海沿岸部からは、縄文時代早期に遡る可能性が指摘されている縄文時代前期の資料が出土する。

道東太平洋岸、勇払平野周辺、噴火湾沿岸からは、縄文前期から晩期にかけての資料が出土する。

津軽海峡沿岸からは、縄文前期から晩期までの資料が出土するが、数量的には縄文中期末～後期初頭のものが大半を占めている。

日本海沿岸からは、縄文時代中期後半になってから、洞穴・岩陰遺跡を中心に銛頭が出土する。

ヨーロッパでは旧石器時代から雄型銛頭による海獣猟が営まれていたことは広く知られていたが、縄文時代早期後半の北海道および東北の遺跡から開窩式の雌型銛頭が発見されている。

該当する遺跡は、北海道は網走市・網走湖底遺跡、東北は八戸市・長七谷地貝塚遺跡及び赤御堂貝塚遺跡である。

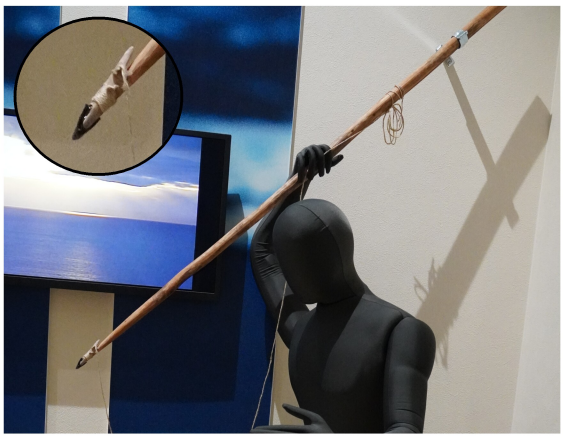


図29　　銛頭とシャフト(柄)
(北海道虻田郡洞爺湖町高砂町)入江・高砂貝塚館所蔵

網走湖底遺跡は銛頭の未成品の可能性がある資料の出土であり、縄文早期後半の東釧路Ⅲ式土器及び海獣骨、魚骨や矢じりなどを伴っている。

前項他に北海道・東北の縄文時代前期～晩期にかけて銛頭が出土した代表的遺跡を紹介した。

長七屋谷地貝塚遺跡からは縄文時代早期後半の赤御堂式土器が主であり、早稲田5塁と縄文時代前期初葉の長七谷地Ⅲ群土器・石器・石製品・土製品・多種類の骨角器(結合式釣針・銛頭など)のほか、貝類・魚類・鳥類・哺乳類骨などを伴っている。

北海道系統とされる開窩式の雌型銛頭は縄文前期以降、北海道だけにとどまらず東北北部や三陸海岸の貝塚遺跡からも出土する。

北海道・東北北部では縄文時代早期後半に出現した雌型銛頭の系譜が連綿として続き、最終的にはアイヌ文化期以降の回転離頭銛であるキテへと引継がれていくのである。

東北の三陸海岸以南でも開窩式銛頭が分布しているが、縄文時代後期約4,000B.P頃の仙台湾を中心として閉窩式雌型銛頭が登場して一般的となっている。

次に、グローバルな視点からの雌型銛頭の年代について考察する。

日本では北海道・オホーツク海沿岸の網走湖底遺跡と東北・八戸湾沿岸の長七谷地貝塚遺跡及び赤御堂遺跡(貝塚)が年代的に古く、これらの遺跡から雌型銛頭が出土する。

東釧路Ⅲ式土器の発見が網走湖底遺跡の年代特定の決め手となっている。

この土器の年代は縄文早期後半から前期前半の約7,000年B.Pとされている。

「北海道北見市教育委員会社会教育部・ところ遺跡の森」の資料では、この東釧路Ⅲ式土器の較正暦年代を約8,000～7,500cal B.Pとし

◎アイヌ民族のキテ(銛)◎

アイヌ民族が鯨などの海獣や大型魚類の漁に使用した回転離頭銛(かいてんりとうもり)。鉄製などの刃先をつけた骨格製・木製の銛頭、その尾部の茎槽(けいそう)に差し込む中柄、中柄に緊縛される長柄、そして銛頭にあけられた索孔から射手までを繋ぐ策縄(さくじょう)からなる.

銛頭が獲物に射込まれると、中柄から離脱して獲物の体内に残る。射手が索縄を引き、一方獲物が逃げようとすると、銛頭は獲物の体内で索孔を支点に反転し抜けにくくなる。

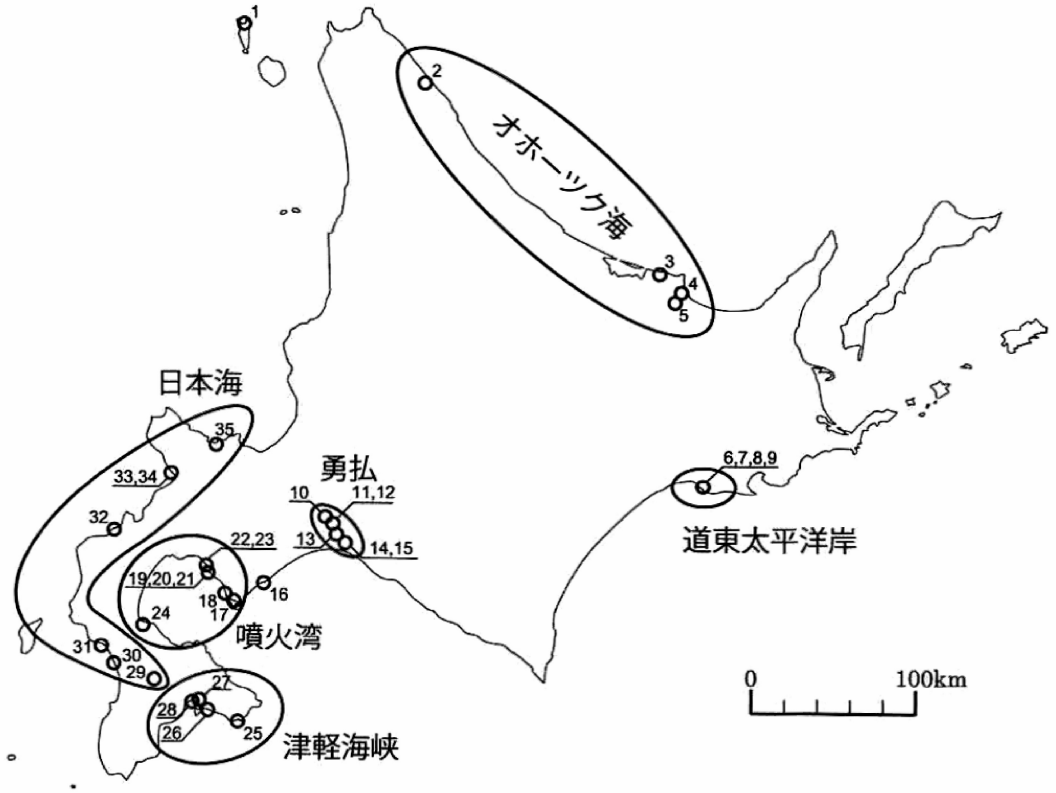
鯨漁の場合など、トリカブト毒を塗り、家紋を刻んだキテを次々と何本も打ち込んで凄絶(せいぜつ)な漁になったという。

環北太平洋諸地域とくにオホーツク文化の銛の伝統を受け、14～15世紀に基本形に成立したと思われ、初期のものは茎槽が開窩(かいか)式で、かつ索孔が縦ないし斜位に並ぶものが多い。

・・・このような銛が最も発達するのは北太平洋、オホーツク海沿岸域などで、オットセイ、クジラなどの海獣漁のために大型のものがつくられ、新しい時代のものは先端に鉄製の刃をはめ込んだ。北海道にもこうした北方漁労の文化が波及し、アイヌの製作した銛頭である〔キテ〕にもその伝統をみることができる。

また現在〔突ん棒〕漁といわれているイルカ類、マグロ、カジキ類のような海の表層を遊泳するものを対象とする銛漁法がある。

出典　日本大百科全書・世界大百科事典



1	船泊	8	緑ヶ岡	15	静川 22	22	入江貝塚	29	稲倉石岩陰
2	日の出	9	天寧 1	16	虎杖浜 2	23	高砂貝塚	30	三ツ谷貝塚
3	トコロ貝塚	10	ママチ	17	ポンナイ	24	コタン温泉	31	鮎川洞穴
4	大曲洞穴	11	美々貝塚	18	北黄金貝塚	25	戸井貝塚	32	柴磯岩陰
5	網走湖底	12	美々 4	19	ポンマ	26	湯川貝塚	33	茶津貝塚
6	東釧路貝塚	13	植苗貝塚	20	有珠善光寺 2	27	サイベ沢	34	茶津 2 号洞穴
7	幣舞	14	柏原 5	21	有珠モシリ	28	久根別	35	フゴッペ貝塚

図５　北海道の銛頭出土遺跡

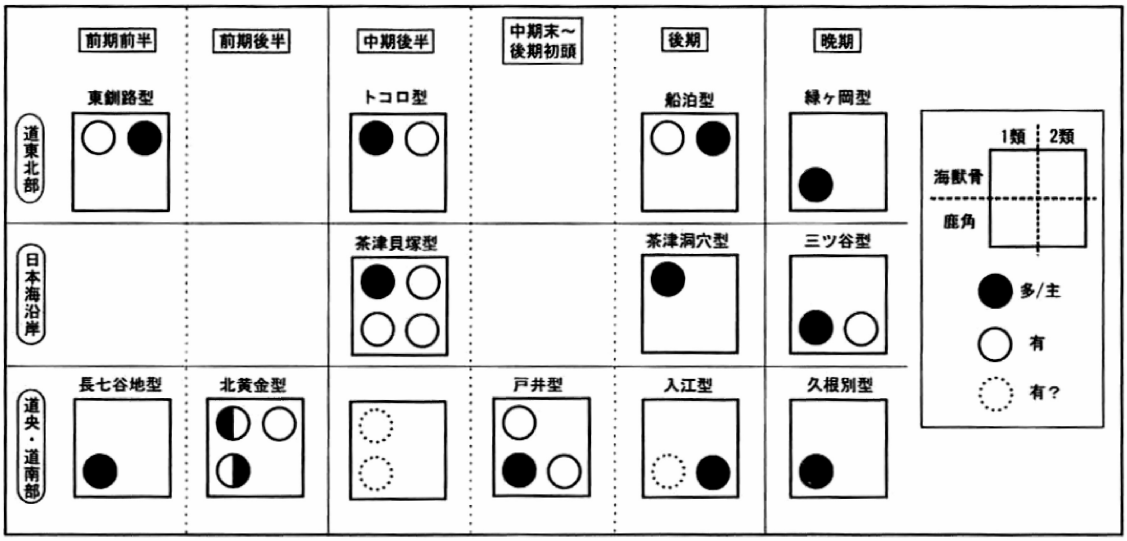


図６　縄文時代北海道の銛頭の形態と素材

図30　「図5北海道の銛頭出土遺跡」　「図6縄文時代北海道の銛頭の形態と素材」
出典：日本列島における銛猟の考古学的研究：30
高橋 健(2008)　北海道出版企画センター

図31　　東釧路Ⅲ式土器
網走湖底遺跡出土、縄文早期後半
（網走市郷土博物館所蔵資料）高橋 健

ていることから、網走湖底遺跡から出土した銛頭もほぼ同等の年代と考えてまず間違いないようだ。

一方、長七谷地貝塚遺跡及び赤御堂遺跡（貝塚）は銛頭に伴って赤御堂式土器が出土しているが、両遺跡では堆積する貝類が年代特定の決め手となる。

八戸市教育委員会（1989）が実施した長七谷地貝塚遺跡における貝層出土の貝（種不明）での14C年代測定では、7,110±120B.P（N-2330）という結果がでている。

一方、青森県教育委員会（1980）八戸市教育委員会（1980a. b.1982）が実施した赤御堂遺跡における貝塚最下層出土のハマグリでの14C年代測定では、7,180±150yrsB.P（Gak-7336）という結果がでている。

しかし、『これらはβ線法によって測定された貝類の年代値がほとんどであり、年代値に影響を及ぼす同位体分別降下の補正がなされていない点や海洋リザーバー効果の影響が考慮されていないなどの問題点があり、再検討が必要であった』という。

長七谷地貝塚及び赤御堂遺跡の実年代を明らかとした『青森県八戸市の縄文時代早期貝塚出土資料の14C年代と海洋リザーバー効果』の報告書（2015年4月）には、『炭化種実4点の14C年代値から赤御堂遺跡および長七谷地貝塚共に、貝層形成は赤御堂式期のほぼ同時期であることが再確認され、その年代は 約 7,280～7,200yrsBP、較正歴年代で約8,150～8,000cal BPとなった』と記載されている。

網走湖底遺跡では約500～1,000年、赤御堂遺跡・長七谷地貝塚では約800～900年14C年代を遡ることとなった。

東北以南でも銛頭が出土する遺跡は多数点在しているが、縄文時代早期・前期に該当する遺跡は皆無である。

あえて挙げるなら、西北九州のクジラの回遊路（五島列島から平戸・唐津・壱岐・対馬）となっている〝つぐめのはな遺跡〟（7,000B.P）であろうか。

現在のところ銛頭は出土していないがその可能性が指摘されている。

西北九州の他の遺跡数か所では約4,000B.Pの開窩式雌型銛頭が出土する。

同様の銛頭は6,000B.P～2,000B.Pに亘る5期の文化層である朝鮮半島釜山市の東三洞貝塚でも確認されている。

また、同貝塚からは多数の雄型銛頭も出土しているが、3,000 B.Pとされる文化層からは閉

図32　　石器及び骨角器
網走湖底遺跡出土　（網走市郷土博物館所蔵資料）

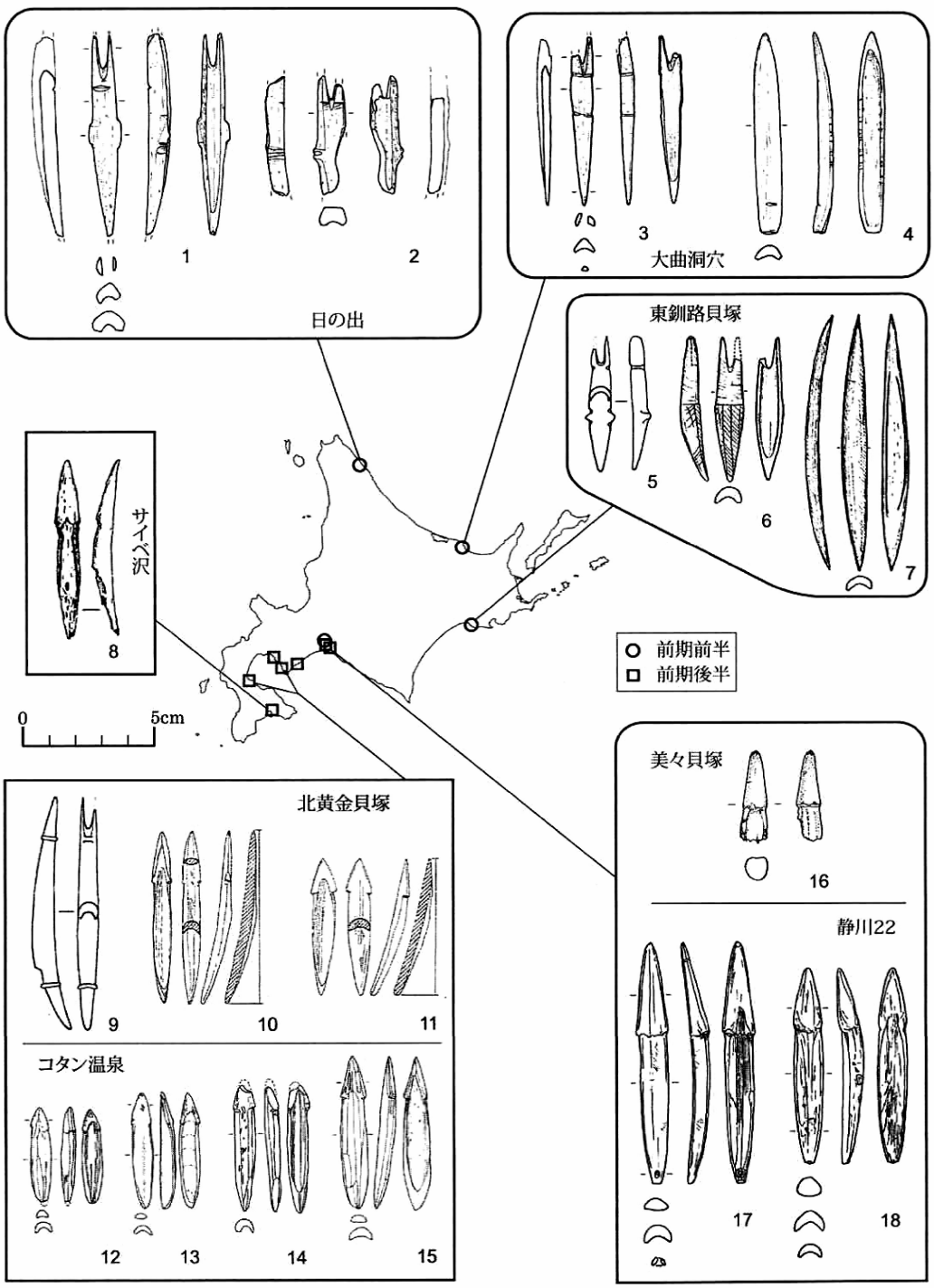


図９　縄文時代前期の銛頭

図33　　図9縄文時代前期の銛頭

出典：日本列島における銛猟の考古学的研究：33　　高橋 健(2008)北海道出版企画センター

窩式銛頭も出土した。

朝鮮半島を北上したロシア沿海州のアムール川の支流であるウスリー川上流ハンカ湖岸に6,080±130 B.P(樹林較正年代)とされる開流遺跡があり、同遺跡からは雌型銛頭が出土した。

図34　　有珠モシリ遺跡出土の骨角器(銛頭)
所蔵機関「文化庁」　保管「伊達市教育委員会」

同じアムール川の支流である松花江上流にも2,900±100 B.P(樹林較正年代)の白金宝遺跡から閉窩式と考えられる銛頭が出土している。

ベーリング海・チュクチ海沿岸(含むアラスカ沿岸)・カナダ北西海岸地域でも雌型銛頭を使用した海獣猟は行われていたと報告されている。

以上雌型銛頭の分布について簡潔に紹介したが、この雌型銛頭(開窩式・閉窩式)の出土地域と出土年代を特定するにあたり、その起源が問題となってくるのである。

というのは、専門家たちの中には次のような意見の持ち主が少なからず存在している。

『すなわち銛使用という点で、大型魚漁と海獣猟との間には密接な関係があると考えられる。

沿海州海岸部さらに北海道における雌型銛頭の背景として、こうしたアムール川流域での大型魚漁の展開があり、そこから海岸部での大型魚漁さらには海獣類猟の成立が考えられるのではなかろうか。

もちろん現段階ではアムール川流域の大型魚漁がどの程度遡るか不明である。

しかしながら北海道縄文早期における「石刃鏃文化」の出現を、沿海州を含む地域との関係で考えようとする研究者も存在する。

そうした大陸側からの文化波及の一環として北海道における銛頭の出現を考えることが出来よう(山浦 2004：24)』

つまり、断定には及ばないが「雌型銛頭の起源」をアムール川(黒竜江)流域・沿海州地域域などの大陸に求めているようだ。

だが、雌型銛頭の大陸での出現は、参考にした資料では縄文時代前期後葉と後期末葉(晩期前葉)の2ヶ所？の遺跡であるのに対して、大陸から石刃鏃文化に伴い波及したと推察されている北海道では雌型銛頭が出土する遺跡は35基を数え、アムール川流域・沿海州地域のそれをはるかに凌いでいる。

何れにしても雌型銛頭が出土する遺跡数及び約2,000年の大陸とのギャップが認められる出土年代に主軸をおき両者を比較すると、雌型銛頭の起源は日本列島しかも縄文早期後葉頃の北海道或いはタイプは異なるが東北北部に軍配が上がるのである。

以上のことから「ヒエ」同様、「銛頭」の起源においても天界(宇宙)より降臨したオキクルミ(オイナカムイ)の偉大な功業を語り継いだ「口承文芸」の正当性を考古学的視点から裏付けたといえるのではないだろうか。

では、「ヒエ」「銛頭」に引き続き、「仕掛け弓＝アマッポ」と「矢毒」について考古学視点から考察する。

❺ アイヌの口承文芸に謡われた アマッポ(自動発射弓矢・仕掛け弓)と矢毒の起源

アイヌ民族が使用する狩猟具には、手弓・槍・ワシ鉤・撲殺棒などとアイヌ語で〝置くもの〟を意味する仕掛け弓の「アマッポ」などがある。

別名を「アマックウ(置く弓)」、「クワリ(弓を置く)」とも称する。

「アマッポ」は人が弓を引き矢を放つのではなく、人の手を借りずに矢を自動発射するものだ。

その仕組みは、獲物の通る山野の道に予め「仕掛け弓台」に矢をつがえた弓を置き、発射寸前状態で引き金をロックする。

引き金の部分に紐(糸)を結び付け、紐の高さを調節して紐が獣道を横断するように立木などに固定する。

紐に動物が触れるとロックが解除され矢が飛び出し獲物を刺殺する。

別名「自動発射式弓矢」『自発式弓矢』とも呼ばれる一種の罠でもある。

弓の弦にはツルウメモドキを、紐(糸)にはイラクサの繊維を、そして矢の先端には矢じり(石・骨・竹)などがはめ込まれている。

図35　クワリ(アマッポ) 和名：仕掛け弓
(平取町立二風谷アイヌ文化博物館所蔵)

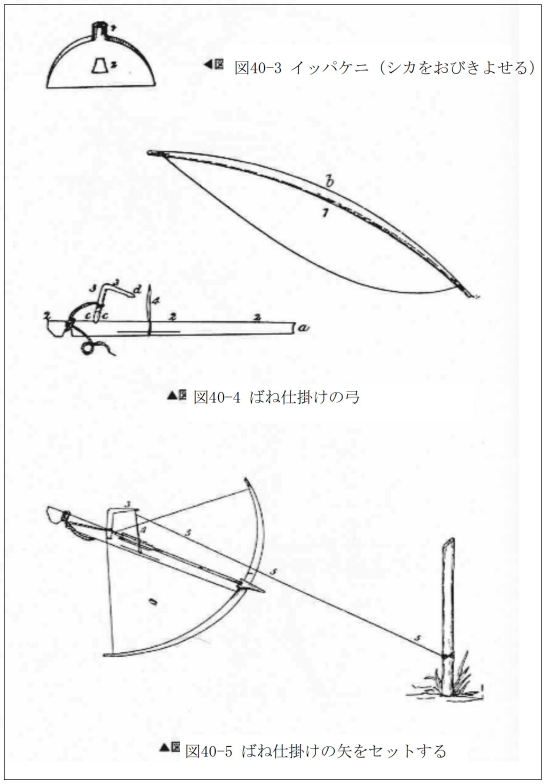


図36　「図40-3 イッパケニ(シカをおびき寄せる笛)」
「図40-4 ばね仕掛けの弓(部品)」
「図40-5 ばね仕掛けの矢をセットする」
出典:アイヌの伝承と民俗：381ジョン・バチラー
安田一郎訳(1995)青土社

図37　北海道アイヌ熊祭り画　（北海道大学植物園 北方民族資料室所蔵）

その矢じり（鏃）には特別な工夫が施され、大型の動物（熊・エゾ鹿）にも致命傷を与えることができるように毒を塗布した。

人が誤って紐に接触する恐れもあり、誤射を防ぐために仕掛け付近の木に目印としてイナウなどを縛り付けている。

アマッポを設置する地域は狩猟集団が決めているようだ。

しかし、北海道開拓使により毒を用いた「アマッポ」の使用禁止令が1876年9月施行となり代わりに猟銃が貸し出された。

この法令により唯一北海道に残っていたアイヌ民族の矢毒文化は衰退、消滅する。

アマッポに酷似したものに紀元前5世紀頃には使用されていた中国の武器〝弩〟がある。

図38　幼少期のヒグマの首に認められる月の輪（イラスト）

同様にアイヌ民族の仕掛け弓（アマッポ）と似た狩猟具はサハリン、沿海州、アムール川流域のツングース系北方諸民族にも見られる。

一般的には「アマッポ」の起源を中国に求め、北方諸民族を経由して北海道アイヌに伝わったと考えているようだ。

経由地となった北方系諸民族の間ではクマ祭り「イヨマンテ」が行われている。

渡辺仁による「クマ祭文化複合体」（渡辺 1972:48）には、それに不可欠の道具として「アマッポ」を挙げている。

本題から少しそれるが「クマ祭り＝イヨマンテ」について少し言及する。

アイヌ民族を教化善導した太陽神オキクルミカムイをアイヌは「丸或いは円」で表す。

そのオキクルミカムイの搭乗機シンタは、アイヌ聖典で「二重の明光・三重の明光」と記され、シンタも円または多重円の太陽マークとして表される。

アイヌ民族最大の祭り「イヨマンテ（クマ祭り）」では祭壇の中央部にその偉大な三重円の太陽マークが飾られ、イヨマンテの主役はもちろん幼少期のヒグマである。

そのヒグマの胸には主に成獣期に消える「月の輪」があり、その輪が消える前にイヨマン

テが行われている。

その輪の中にオロッコ的な偶像崇拝の対象物とは全く違う意味の「自然の太陽マーク」を見出したアイヌは、その消えんとするや育てた熊が大人になろうとするとき天上に送ったのがその起源である。

アイヌ民族はシンタに搭乗したオキクルミカムイの再臨を願い、その願いを子グマに託して天上に送ったと推察されるのである。

近代に至り「イヨマンテ」は形骸化して祭壇の中央から偉大な太陽マークが取り去られ、同時に民族の栄光も消え去った感がある。

イヨマンテの儀式においてアイヌ民族は数々の計り知れない恩恵を受けた「オキクルミ」と「シンタ」を象徴する太陽マークを祭壇の中央に飾り神聖視していたが、自然の太陽マークをヒグマの子の胸に見出すということは、既にオキクルミがアイヌモシリを去ったことを意味しているのである。

イヨマンテの起源は北海道のアイヌであり、その開始時期をオキクルミがアイヌモシリを去った縄文時代中期頃に求めることができるのである。

参考までに、北海道の北黄金貝塚遺跡と有珠モシリ遺跡から同系統の匙型のスプーンが出土している。

北黄金貝塚のスプーンの出土年代は約5,500年前(縄文時代前期)、有珠モシリ遺跡の2本のスプーンの出土年代は約2,000年前(続縄文時代初頭)で、両遺跡のスプーンには約3,000年のギャップがあるにも関わらずその特徴(スプーン形状・透かし彫り・二個一対の突起・頭部の大きな突起)には、有珠モシリ遺跡のスプーン頭部のクマの彫刻を除くと驚く程の共通点が認められる。

古代人がクマに対して特別な感情を抱き神聖視していたと認識される。

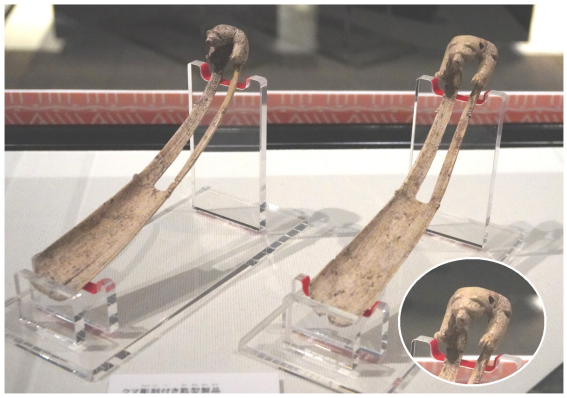


図39　クマ彫刻付き匙型製品(骨角器)
有珠モシリ遺跡出土
所蔵機関「文化庁」　保管「伊達市教育委員会」

◎矢(毒)の歴史的記録◎

矢毒にはアイヌ語で「スルク」と呼ぶトリカブトの塊根が主剤として使用される。

それを「附子(ブシ・ブサ・ホサ」と毒の製法は製作者によって異なり、トリカブトの採取する季節、地域によっても毒に強弱がある。

トリカブトを単独で使用することもあるが、アイヌ民族は矢毒の効果増強に蜘蛛、獣の肝、ハシボソカラスの肝、松脂、唐辛子などを混入し、矢じりに塗布したり、付け込んだりして使用していたが、各自によってその製法は異なり秘事であるという。

アイヌ民族がその矢毒を使用した記録が存在する。

1741年(寛保元年)、仙台藩士・佐藤信要が藩内の名所旧跡について著した「封内名蹟志・巻第12遠田郡」には、毒や矢に関連する地名が登場する。

約1200年前、桓武帝の時世の延暦年間 (A.D 782～806)にヤマトが三度のエゾ地(奥州)侵略を強行した。

その三度目のヤマト軍約4万の大将は坂上田村麻呂、迎え撃つエゾ(アイヌ)軍の大将はアテルイ、そして副将モレであった。

両軍が激突した宮城県遠田郡には、エゾが毒矢を射った『毒矢獄』、ヤマトが箭(矢の古名)

を射った『射箭嶺』の地名が記されている。
毒が付く地名からエゾの矢には附子が塗布されていたのである。
また、弘法大師空海の漢詩を撰集した「遍照発揮性霊集(835年頃)」にも矢毒についての記録(815年)が残されている。
空海が小野朝臣岑守(オノノトモオミシンシュ)に送った送別の歌詩には『「陸奥は最も和らげ難し」中略、「毛人羽人境界を接し」中略、「髻中(頭上で束ねた髪)には骨毒の箭(骨のヤジリに毒を塗った矢)を挿著し、手上には常に刀と槍とをとる」後略』、とある。
陸奥とは古代東北の主に太平洋側、毛人とはアイヌ、骨毒とは附子のことである。

アマッポ(仕掛け弓)の描写と推測できる記録は「日本書紀29巻下天武天皇4年(675年)4月17日の条に〝狩猟・漁猟禁止令と肉食禁止令〟として認められる。

◎「日本書紀29巻天武天皇
4年4月17日」原文◎
庚寅、詔諸國曰「自今以後、制諸漁獵者、莫造檻穽及施機槍等之類。亦、四月朔以後九月卅日以前、莫置比彌沙伎理・梁。且、莫食牛馬犬猨鶏之宍。
以外不在禁例。若有犯者罪之。」

◎「日本書紀29巻天武
4年4月17日」現代語訳◎
十七日、諸国に詔して、「今後、漁業や狩猟に従事する者は、檻や仕掛け槍などを造ってはならぬ。四月一日以後、九月三十日までは、隙間のせまい梁を設けて魚を獲ってはならぬ(稚魚の保護)。また牛、馬、犬、猿、鶏の肉を食べてはならぬ。それ以外は禁制に触れない。もし禁を犯した場合は処罰がある」

原文の「機槍」は日本語訳の「仕掛け槍」に対応する。
「機槍」とは中国語では機関銃を意味するが7世紀にそのような武器は存在せず、また日本において自動発射式の槍を使用した記録も今のところ見当たらない。
つまり、「機槍」とはアイヌが使用する自動発射式の「仕掛け弓＝アマッポ」を示唆していることになる。
既に7世紀の日本において「アマッポ」はメジャーな狩猟具であったと考えられる。
時代を遡る神武(崇神)東征の時世(紀元2～3世紀頃)、大阪の浪速(現難波)に到達したヤマトは白肩津を船で行軍中、クサエノ坂で侵略を阻止する原住民の族長トミノナガスネヒコの軍と対峙、戦闘となる。
神武の兄の五瀬命は「流れ矢」或いは「痛矢串」にて肘と脛に深手を負い、矢傷がもとで約１ヶ月後に没し、結果的にヤマトは撤退を余儀なくされた。
難波からの上陸をあきらめたヤマトは紀伊半島を迂回して熊野方面から上陸、宇陀(現奈良県宇陀郡付近)において原住民「兄宇迦斯」又は「兄猾」、「弟宇迦斯」又は「弟猾」と遭遇した。
「弟猾」はヤマトに帰順を誓うが、「兄猾」は帰順を拒否してヤマトと戦闘となる。
古事記現代語訳では兄弟の名を「兄宇迦斯・兄猾＝エウカシ」「弟宇迦斯・弟猾＝オトウカシ」と訳している。
「エカシ」とはアイヌ語で「祖先・老人・祖父・壮年男子に対する尊称」の意である。
熊野地域から上陸したヤマトは、多くの原住民と戦闘になっているが、その中で騙し討ちにした忍坂(現奈良県)の八十梟恣(ヤソタケル)を「久米歌」の中で「エミシ(アイヌ民族の蔑称)」と呼称している。
またヤマトと原住民とが戦った奈良県一帯には他の地域を圧倒する程のアイヌの神具イナウ(削りかけ・削り花)が分布する。

図40－1 毒矢

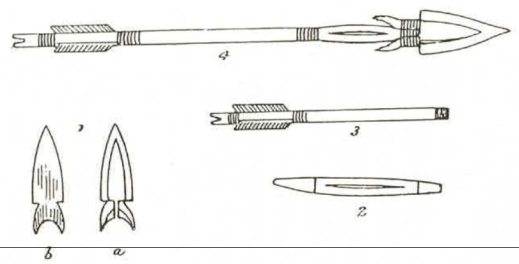


図40　出典：アイヌの伝承と民俗：379 ジョン・バチラー安田一郎訳(1995)青土社：

これらのデータの考察から、ヤマトとの武力侵略に果敢に立ち向かった原住民はアイヌ系の人々であったと推察できた。

また神武の兄である五瀬命に致命傷を与えた原住民側の弓矢には、猛毒としての「附子」が塗布されていた可能性が極めて高いのであつた。

また神武東征記によれば、八十梟恣(ヤソタケル)との戦いに際し、ウケイの卜占を行い願い事(大和地域一帯の平定)の成就を占いに託している。

内容は「八十平という祭器を焼き、水なしで造り上げた飴(たがめ・たがに・あめ)を祭器に入れて、それを川に沈めて川魚が笹のように浮き上がれば願い事が叶うし、そうでなければ叶わない」というもので川魚は浮き上がったと記録されている。

おそらく魚を仮死状態とする「毒もみ」「毒流し」の技法が用いられたと推察される。

「毒もみ」には山椒やオニグルミを袋に入れて揉み出すことから、飴を水なしで造るのとは製法が違うようだ。

飴が何を意味しているのかは分からないが狂言には「飴と附子」という演目がある。

おそらく、飴とはアイヌが「スルク」と呼ぶトリカブトの毒のことではないだろうか。

757年(天平宝字元年)、藤原仲麻呂により施行

◎ 毒 に 関 す る 伝 説 ◎

「これは毒の起源である。毒は神であり、その数は二つであり、夫と妻であり、以前は天国に住んでいた。さて、神聖な『アイオイナ』が天から降りて来たとき、彼は人々が狩猟で使う毒を携えて来た。雄性の毒の名前はケレプトゥルセ Kerep-turse、すなわち『削って滑り落ちる』(ケレプ＝ 削る、トゥルセ＝転がる、墜落する)だった。
それは非常に強力で、それでひっかくだけで、死をもたらした。
その妻の名前は、ケレブノエ　Kerep-noye、すなわち、『削ってねじる』(ノエ＝ねじる)だった。これはゆっくりと効く毒で、その作用はおだやかである。
使うときには、それを矢の上にのせ、先端をねじる。
それゆえ大部分の毒は獲物の体内に入った。
さて、雄性の毒を使う方法はつぎの通りである。
猟師は矢の先に少量の毒をつけ、動物の足跡を見つけ、祈願をし、そして動物の通る方向に射る。
もし彼がそうするなら、矢は飛んで行き、ついに動物に出会って、それにあたり、それを殺す。
このような矢は命を与えられていて、願いを聞き入れ、要求された通りにした。
しかし、ああ、この毒の作り方を今は誰も知らない。
知識はつぎのようにして失われた。
昔々、ある猟師がこの種の毒の付いた矢をもって出かけ、シカの足跡を見つけた。
新しい足跡を見て、彼は矢をえびらからとり、それにつぎのように祈願した。『おお、なんじ、神聖なケレプトゥルセの矢よ。なんじは実際高貴な神だ。なんじはこのシカの足跡に沿っていけ。そして昨日ここを通った動物を殺せ』と。
そう言って、彼は矢を射た。矢は足跡に沿って進みに進んだ。しかしシカは丸一日まえに通ったので、矢はシカをつかまえることができなかった。それで矢は地面に落ちた。
猟師は矢を追って行って、矢を見つけたとき、怒ってそれを強く踏みつけた。そして言った。『おおなんじ〝削り落ち、滑り落ちた〟矢よ。なんじはまったく弱い。昨日のようなごく最近にこの道を通ったシカをつかまえることさえできない。
私はもはやなんじを使わないし、なんじに神酒を捧げないつもりだ』と。
そこでこの種の毒の中に漬けられたすべての矢は、再び天国にむかって出発し、それ以来見られなくなった。今日アイヌが用いている毒は雌性のものである。
それゆえ、それを塗った矢はときどき目標からはずれるし、また動物を殺すのがゆっくりである」と、いう。　　出典　アイヌ伝説と民俗
ジョン・バチラー安田一郎訳(1995)青土社：377-378

シャクシャインのチャシ跡の真歌公園に建設された英傑シャクシャインの像。人間皆平等の精神からヤマト(松前藩)の非人間的行動に対して正義を貫き通すべく奮戦するも和議の席上にて謀殺される。

(北海道日高郡新ひだか町静内)

された「養老律令」には毒についての罰則規定が設けられている。

その養老律令には『毒薬とは、チン毒、治葛(ヤカツ)、烏頭(ウズ)、附子(ブシ)の類にして人を殺すに堪ゆるものとし、これらの毒薬を人に服用せしめ又は売る物は絞殺に處し、売買しても未だ用いざる者は近所に流罪に處す』と記されている。

この時代毒が広く庶民にも蔓延していたことが窺われ、戦いに敗れたヤマトに服属させられた原住民の狩猟用「附子」もその対象となったものと考えられる。

以上、矢毒に関する古文献の記録を抽出した。

しかしながら、矢毒に関する有史以前の記録が存在しないからといって原住民側の矢毒の使用が否定されるものでもない。

有史以前の遺跡から出土する「弓矢」、そして「石や骨の矢じり及び銛頭」は、それを補えうる立派な資料になるのではないだろうか。

例えば、縄文後期の忍路土場遺跡(北海道小樽市忍路)からは、短弓93本(完形弓13本)、弓?や弓材123本の出土が報告されている。

本州の遺跡では縄文前期～晩期の完形弓50本、弥生時代の完形弓34本の出土が報告されている。

さらに、縄文早期後葉の網走湖底遺跡からは北海道が起源と考えられる雌型銛頭、黒曜石の矢じり、そして遺跡年代を特定した「東釧Ⅲ式土器」が共に出土している。

弓の出土数が少ないと思われるかもしれないが、木製品は土中の環境に非常に影響されて、ほとんどが腐食して残らないのである。

一般に、木製品は土中において水分パック(酸素や昆虫食害からの遮断)状態が維持されない限り長期間その状態を保つことは不可能である。

縄文・弥生時代の弓が出土する遺跡も低湿地帯にほぼ限定される。

それに対して黒曜石は脆く衝撃や圧力により簡単に剥離するが、土中での長期間の保存には耐えられ、多くの遺跡からその出土が認められる。

つまり、遺跡から矢じりが出現するということは、それらの地域では弓、仕掛け弓、槍、銛などの活用に加えて、大型の動物や海獣を仕留めるには、狩猟具の効果を格段に増強さ

松前城の裏手にある耳塚。シャクシャインと共に戦い処刑されたアイヌの首謀者14名の首の代わりに持ち帰った耳を埋めた場所。

(北海道松前町松代)

アテルイの居城といわれる小高い山（羽黒山）の頂上には石堰を埋めた古塚があり、その古塚の上には地元の有志の手によりアテルイとモレの慰霊碑が建てられている。
山の頂上付近にはアイヌ独特のチャシ（城・砦）跡と推察される空豪(?)が階段状に形成されている。　（奥州市水沢区羽田町御山下）

せる「附子」の存在が必要不可欠であったのではないだろうか。

「アイヌ語」と考えられる地名が広く日本列島に散見され、「削り掛・削り花」と「イナウ」及び「土器文様」「装飾古墳文様」と「アイヌ文様」との類似性が論じられる。

つまり、列島には縄文時代の早期からアイヌ民族が居住していたと考えられるのであった。

陸上の狩猟(熊・鹿・その他小動物)では、弓矢や仕掛け弓(アマッポ)に矢じりを装着して、そこに附子を塗布、付け込んで使用した。

また大型海獣猟(オットセイ・アザラシ・クジラなど)では、銛に銛頭や矢じりを装着して、そこに附子を付け込んで使用したのである。

小さな尖頭器で大型獣を仕留めるというその主役が附子であった。

本州では弥生期中葉から後葉に至り、弓矢や矢じりに改良が加えられている。

弥生中期の紫雲出山遺跡(香川県三豊市)から出土した打製石鏃の分析を行った佐藤眞(1964)は「大量に出土した石鏃の寸法や重量を数量的に分析し、大型化していく様相を明らかにしたうえで、狩猟具から対人用武器に弓矢が分化していったことを示すものである」と見解を述べている。

佐藤は、弥生中期の石鏃や弓矢の変化を指摘しており、弥生中期といえばヤマトの「神武東征」と時期がラップするかもしれない。

本州においては矢毒文化とヤマトの武力侵略とが相関し、ヤマトが近畿を拠点として九州及び中部・関東・東北を順次侵略することで原住民の矢毒文化も順次衰退する。

ヤマトの計略にはまり斬首されたアテルイ、モレ亡き後はマタギや蝦夷(北海道)を除いてほぼその文化に終止符が打たれるのである。

そして、矢毒文化の衰退に拍車を掛けたのが675年施行の「狩猟・漁猟禁止令と肉食禁止令」及び757年施行の「養老律令」であった。

アイヌ民族の口承文芸では、この矢毒はアエオイナ(オキクルミカムイ)が天界より持参したものであるとその起源について言及してい

る。

「毒と矢」の起源伝承からは以下のことが判明する

1. アエオイナ(オキクルミカムイ)が天界より雄毒(強力)、雌毒(雄毒より穏か)の二種類を持参。
2. 毒の製作と使用法をアイヌに教える。
3. 毒を塗布した矢には意志があり、ミサイルの如く行動する。
4. 標的の目視不可能状態であっても、矢の効力が有効時間内であれば追尾は可能。
5. アイヌが効力の時間外に特殊矢を悪用、目的が達せられず矢を踏みにじる。怒った矢と雄毒は天界に帰還する。
6. アイヌに残されたのは雌毒。

ここでは「アマッポ」については触れられていないが、赤外線追尾システムを超越した科学力を有して飛行したと推測される特殊矢と雄毒について語られている。

「アマッポ」と附子の製法は、オキクルミカムイがこれらの特殊矢と雄毒をアイヌ民族から取り上げた後に教えたと伝えられている。

この「意志を持つ特殊矢」の悪用が、オキクルミをアイヌモシリから去らせた要因の一つとなったのであった。

北海道の住居遺跡の分析から縄文期・続縄文期・擦文期にかけてほぼ一貫して遺跡が使用された考古学的事実が浮上した。

さらに、北海道における「民族集団の交代」がなされていないとする専門家の見解もあり、それらを検討すると、アイヌ文化期に限らず縄文時代の速い段階からのアイヌ民族の先住性が指摘されるのである。

亀ヶ岡式土器文化(3,100B.P－前3・4世紀)の伝播を参考にすると、紀元前8世紀頃の大江前遺跡(九州佐賀県)から亀ヶ岡式土器が出土している。

図41　　仕掛け弓台
石狩市教育委員会提供　出典「石狩紅葉山52号遺跡＝札幌市K483遺跡発掘調査報告」P103仕掛け弓台

伝播に要した時間は約300年以内である。

となると、矢毒文化は縄文時代前期には列島全域に拡大していた可能性が高い。

『毒に関する伝説』『イヨマンテ』『縄文時代からの遺跡の連続性』などが示唆するように、アイヌ民族の遥かな古代からの先住性が示されているのである。

これらのことから、オキクルミカムイが「アマッポ」や「附子」の製作に深く関与していたことは明白で、「ヒエ」や「銛頭」同様、その時期は縄文早期後葉、または縄文前期初頭であったと推論できた。

北海道石狩市紅葉山52号遺跡からは縄文時代前期後葉の地層と中世期の川の流れの影響を受けた混濁地層から「アマッポの基台」が出土しているが、基台単体での年代測定が実施されておらず出土年代は不明である。

あくまでも仮定であることを前置きして、「アマッポの基台」が縄文時代前期後葉の出土遺物であると判定されたなら、オキクルミカムイの降臨年代を特定する重要な資料になる筈であったが、いつか年代が特定されることを期待したい。

次号では、⑥－⑨の内容について多様な視点から考察する。

つづく